

LESSON BOOK REVIEW

～読解基本ルール70～

ここに載せた Rule は、「英文読解スマートリーディング LESSON BOOK」(L・B)の中の様々なルールを項目別に再編集したものです。Rule のより詳しい内容・説明については、同書の該当ページを参照して下さい。

1. 文型判断と読解の基本

Rule-1

各品詞の文中での役割(働き)

(L・B 23ページ)

1. 「名詞」。 ☞ (S・O・Cといった文の骨組みを作る品詞であり)あらゆる品詞の中で最も重要な品詞!

(1) 「主語(S)」「目的語(O)」「補語(C)」のどれかになる。

(ex) The information is important. その情報は大切だ

S

I don't believe the information. ボクはその情報を信じない

O

What I want is the information. 私が欲しいのはその情報だ

C

(2) 「前置詞・準動詞の目的語」になる。

(ex) I depend on my parents. ボクは両親に頼っている

※my parentsは前置詞のonの目的語になっている。

I hope to visit your house. 君の家を訪ねてみたいです

※your house は不定詞(to visit)の目的語になっている。

☞ただし「時」「方法」「場所」「距離」「程度(頻度)」などを表す名詞については、文中での働きは「副詞」と同じであることが多い。

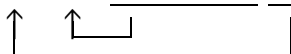
(ex) He came here three times. 彼は三度ここに来た

※three timesという名詞は、動詞のcameにかかる副詞としての働きをしている。

2. 「前置詞+名詞」。 ☞ (基本的に)S・O・Cにはならない! 「名詞」とは対照的!

(1) (直)前の名詞を修飾する。 ☞ (特に前に名詞がある場合は「前置詞+名詞」は80%はこちらの用法。

(ex) the influence of the East on the West 西洋に対する東洋の影響



※of the Eastもon the Westも共にthe influenceを修飾している。このように、場合によっては「前置詞+名詞」が、直前よりもっと前の名詞を修飾することもある。

なお前置詞の後には基本的に「名詞の仲間(名詞、代名詞、動名詞等)」がかかる。「S+V」や動詞等は絶対こない。to不定詞もこない。

(2) 名詞以外を修飾する。

(ex) I went to school. 私は学校に行った



※to schoolは、動詞のwentを修飾している。

☞「前置詞+名詞」は文の主要素(S・O・C)になることはない。それから、文中に「前置詞+名詞」を発見したら、まずは(直)前にかか

名詞がないかどうか探してみる。あればその名詞にかけて訳してみても意味が通じるか確かめてみる。ダメならそれ以外の語句にかけてみる。

3. 「形容詞」。

☞ 形容詞の働きは(基本的に)以下の2つだけ!

(1) 直前直後の名詞を修飾する。

(ex) a kind girl 親切な少女

↑
a girl kind to other people 他の人に親切な少女

※形容詞は基本的に、一語で名詞を修飾する場合には名詞の前に置かれ、他の語を伴って全体で名詞を修飾する場合には、その名詞の後ろに置かれる。

(2) 「SVC」や「SVOC」の「C」になる

(ex) She is kind. 彼女は親切だ
S V C

☞ 形容詞は、語尾が **-ful, -less, -tive, -able, -ible, -ary, -ous, -ic, -ical, -ial, -ual, -ate[ite], ient, iant** 等で終わるものが多い(全てではない)。

☞ 形容詞が、文中で直前直後にかかれる名詞がなければ、もうその形容詞は「C」になっているとみていい。そして形容詞が文の主要素になるのは「C」になる場合だけ。それから、形容詞の60%は「良い」「悪い」、つまりgood型、bad型に分類できる(Rule-68を参照せよ)。

4. 「副詞」。

☞ (基本的に)S・O・Cにはならない!

名詞以外(「形容詞」「副詞」「動詞」「文全体」のいずれか)を修飾する。

☞ 副詞は、語尾が **-ly** で終わるものが多い(これも全てではない)。

5. 「動詞」。

☞ 動詞には「他動詞」と「自動詞」の2種類がある!

(1) 後ろに目的語になれそうな名詞があれば(その動詞は)他動詞。

(2) 目的語が見あたらなければ(その動詞は)自動詞。

☞ ただし、「remain C(名・形・分): (依然として)Cのままである」のような、自動詞でも直後に名詞を(補語として)とるものもあるので注意。「O」か「C」かの見極めは、SVOは「S≠O」、SVCは「S=C」の意味関係になる点で判断する。

Rule-2

「句」のまとめ

(L・B75ページ)

1. 句とは、複数の語が集まって1つの意味を構成しているが「S+V」の形をしていないものこと。

2. 句は、文中での働き[機能]から3つの種類に分けられる。

(1) 名詞句………SOCになる。又は前置詞の目的語になる(つまり前置詞の後ろに置かれる)。

(2) 形容詞句……(代)名詞を修飾する。SOCにはならない(前置詞句を除く)。

(3) 副詞句………名詞以外を修飾する。SOCにはならない。

(ex) To study English is interesting. ☞ 下線部の不定詞句は、主語になる名詞句。
⑤ ⑥ 訳は「英語を勉強することは面白い」。

The hill covered with snow was great. ☞ 下線部の分詞句は、直前の名詞(the hill)を修飾する形容詞句。訳は「雪に覆われたその丘はすばらしかった」。

↑

I studied hard to pass the exam. ☞ 下線部の不定詞句は、動詞(studied)を修飾する副詞句。訳は「僕は試験に通るために一生懸命勉強した」。

↑

Rule-3

「節」のまとめ

(L・B72ページ)

1. 節とは「従位接続詞(関係詞・疑問詞)+S+V」の構造をしているものこと。

2. 節には、文中での働き[機能]から3つの種類に分けられる。

(1) 名詞節……SOCになる。又は前置詞の目的語になる(つまり前置詞の後ろに置かれる)。

(2) 形容詞節…(代)名詞を修飾する。SOCにはならない。

(3) 副詞節……名詞以外を修飾する。SOCにはならない。

(ex) What he did is not acceptable. ☞ what節は主語になる名詞節。訳は「彼のやったことは受け入れられない」。

⑤ ⑦

Anyone who wishes to leave may do so. ☞ 関係代名詞のwho節は直前の代名詞を修飾する形容詞節。whoは和訳の必要なし。訳は「帰りたいと思う人は帰ってよしい」。

↑

He did it though I told him not to. ☞ though節は、動詞のdidを修飾する副詞節。

↑

訳は「私がするなと言ったにもかかわらず、彼はそれをした」。

Rule-4

節の終わりの見極め法

(L・B25/33ページ)

1. 1つの節に動詞は1つだけ。

つまり、1つの節に動詞が2個も3個もあることは無いということ。

2. 節の初めから数えて2つめの動詞よりも(手)前でその節は終わっている。

(ex) Who will be elected captain of the team is a matter of deep concern to the players.

⑤ ⑦ 誰がチームのキャプテンになるかは、選手達にとって深い関心のある問題だ

このルールを使えば、上の英文の文頭のWho節は、(Whoから数えて2個目の動詞である)isの手前で終わっていることが一瞬で分かる。そしてそのisが⑦(文の骨組みになる動詞)になっていると分かる。

ただしその節内に更に別の節が存在する場合、その(別の)節内の動詞を、(動詞を)数える際の数に入れてはならない。

(ex) The man who said that you were a liar is Kim. 君を嘘つきと言ったのはキムだ

⑤

⑦

☞ 上例でもwho節の終わりを見極める際、節内の(別の)節であるthat節中の動詞(were)は、動詞を数える際の数に入れない。そうするとwhoから数えて2個目の動詞はisになる。そしてこのisが⑦(文の骨組みとなる動詞)と分かる。

文の骨組み[主要素]を決定する際、いったん()でくくってしまうと
いいもの(つまり文の骨組みにはならないもの)

(L・B35ページ)

1.前置詞+名詞。

(ex) In those days people lived there.

⇒ (In those days) people lived there. その当時、人々はそこに住んでいた
⑤

2.副詞(-ly)。

(ex) My father died peacefully.

⇒ My father died (peacefully). 父は安らかに亡くなった
⑤ ⑥

ただし、いくら副詞といっても

①否定の副詞……hardly「ほとんど～ない」、scarcely「ほとんど～ない」、rarely「めったに～ない」、
seldom「めったに～ない」、no longer「もはや～ない」等。

②論理接続の副詞…however「しかしながら」、therefore「それ故」、accordingly「それゆえ」等。

(は)いったんカッコでくくるのはいいとしても)意味まで読みとぼしてしまっは(はい)けない。

①を無視すれば、文(節)の内容が変わってしまう。②を無視すれば、文と文(節と節)の結びつきが見えなくなってしまうからだ。

特に論理接続の副詞(「論理マーカー」とも言う)についての知識を身に付けることは、読解力向上のための大きなカギとなる。これについてはホーム
ページ内の「頻出論理マーカーのまとめ」をプリントアウトし、熟読すること。

3.関係詞節。

(ex) The man who was standing over there is her husband.

⇒ The man (who was standing over there) is her husband.
⑤ ⑥
向こうに立っていた男性は、彼女の旦那さんです

4.カンマ(,)やダッシュ(-)で囲まれた箇所。

(ex) You should, if you want some advice, go to his office alone.

⇒ You should , (if you want some advice) , go to his office alone.
もし何らかの忠告が欲しければ、彼の事務所に1人で行くべきだ

5.主節よりも左側にあるもの

(従位)接続詞・関係詞・疑問詞が先頭についていない「⑤+⑥」(つまり裸のS+V)のことを主節という。主節よりも左側にあるものは、(倒置構文を除き)基本的に副詞の働きしかしない。つまり文の主要素にはならないのだ(副詞句・節のうまい訳し方については Rule-70 を参照せよ)。

(ex) When she was young, she was happy.

⇒ (When she was young), she was happy. 彼女は若い頃幸せだった
⑤ ⑥ C

Rule-6

what と how が導く節や句の役割(働き)

(L・B33ページ)

what や how が導く節(句)は、基本的に「S(主語)」「O(目的語)」「C(補語)」のどれかになる。また前置詞の後ろでその「目的語」になる。

(ex) What he said is not true. 彼の言ったことは本当ではない
S V C

How he did it made her angry. 彼のやり方が彼女を怒らせた
S V O C

Ask him how the word is pronounced.
V O₁ O₂

その語がどう発音されるのか彼に尋ねなさい

The result was different from what they had expected.

【前置詞の目的語】

その結果は、彼らの予想したことは異なっていた

例外は「what we call:いわゆる」「what is more:おまけに」などの決まり文句的なもの(詳細は42ページ(注7)を参照せよ)。

(ex) He is what we call a man of culture. 彼はいわゆる教養人だ
S V C

上の英文でも what we call は、文の骨組みにはなっていない。

彙成り立体的には what we[you・they] call C(形・名)は「Cと呼んでいるもの」という名詞節から来ている。

Rule-7

英文読解の基本手順

(L・B80ページ)

- 1.まず英文を見たら、単語の品詞を確認、また語句のまとまりである句や節の範囲を決める。
- 2.次にそれらの語、句、節の中で、文の主要素になりうる以下の2つを浮かびあがらせる。
 - (1)名詞とその仲間(SOCになる) ☞文の主要素になれるのはこの2種類しかない!!
 - (2)補語になる形容詞とその仲間
- 3.そのための手段として、文の主要素にならないものを()でくくるといった作業を試してみるのも効果がある。
- 4.そうして、その英文の文型を決定することにより、文の意味が決まる。

Rule-8

⑤と⑦の間の挿入部分の可能性

(L・B34ページ)

⑤と⑦の間でカンマやダッシュによって挿入されている名詞のほとんどは、直前の⑤(の性質・身分・状況・行動等)を説明している(つまり⑤と内容的にイコール関係)と思ってまず間違いはない。

(ex) John — the only son of the Foreign Minister — was deeply interested in the international situation.

上の英文でも、the only son of the Foreign Minister(その外務大臣の一人息子)は、Johnの(身分の)説明(つまりJohnとイコール関係)になっている。

また、⑤と⑦の間にthat節が挿入されている場合、そのthat節は100パーセント⑤を修飾し、(⑤を)説明していると見ていい。

④文法的にはそのthat節は、関係代名詞節である可能性と同格節である可能性がある。同格節となる場合、thatは接続詞で「～という00」と訳す。関係代名詞のthatと接続詞のthatの見極め方についてはRule-6を参照せよ。

Rule-9

thatが接続詞なのか関係代名詞なのかの見極め法

(L・B37ページ)

関係代名詞のthatの後ろには、S、O、Cのどれか1つが欠けた「不完全な文」がくるのに対して、接続詞の後ろには「完全な文」が続く。

①that + 不完全な文 ⇨ thatは「関係代名詞」。

(ex) She's the woman that lives next door to us.

「不完全な文」

④主語が欠けている。

彼女は私たちの隣に住んでいる人です

②that + 完全な文 ⇨ thatは「接続詞」。

(ex) She told us that the road was closed.

「完全な文」

その道路は通行禁止になっていると彼女は私たちに教えてくれた

関係代名詞のthatの働きは、基本的に1つで「(直)前の名詞[名詞]を修飾する」ことだけ。

Rule-10

後置修飾の過去分詞の見極め法

(L・B182ページ)

動詞の過去形と過去分詞形が同じであるような動詞は、それが動詞として使われているのか、過去分詞(の後置修飾)として使われているのかを見分けるのに苦労する。しかしこの両者の見極めができないということは、その英文の動詞がどれか分からないということになるわけで、読解にとっては致命的な問題である。この見分けのつきにくい、しかし正確な解釈には是が非でも必要な、過去分詞(p.p.)と動詞(V)の過去形を見分ける方法が以下である。

1.見極め方その(1)

その語が元々他動詞であるなら、後ろに目的語があるはず(他動詞は目的語がなければ存在できない)。したがって、本来他動詞であるべきはずの「~ed」が、後ろに目的語をとっていないなら、それは過去分詞であると判断する。

2. 接続詞

Rule-11

等位接続詞(and, but, or等)の働き

(L・B42ページ)

1. 等位接続詞の最大の特徴は、語と語、句と句、節と節とを(対等の関係で)結びつけるということ。

(ex) I will write either to the secretary **or** to the president.

私は秘書か社長のどちらかに手紙を出すつもりです

☞ orは、句と句(to the secretaryとto the president)を対等の関係(つまり両者共にwriteを修飾している)で接続している。

2. 読解においては、文中に等位接続詞 (and, but, or等)を発見したら、それらが何と何(誰と誰)を結んでいるのか、等位接続詞の左右の「同構造」をヒントにして、正確に見極めよ。その結ばれたもの同士には以下のような2つの共通点があるはず。

① 構造的に等しい ☞ 例えば一方が「名詞」なら、もう一方も「名詞」。一方が「S+V」ならば、もう一方も「S+V」のはず。

② 文中での働き「機能」が等しい ☞ 例えば一方が文の主語になっているなら、もう一方も文の主語のはず。

3. 特に3つ以上の語句を結びつける場合、「A, B and(or) C」のように、結びつける最後の語句の直前に and(or) をつけることが多い。したがって、英文中で「A, B and(or) C」あるいは「A, B, C and(or) D」といった構造を発見したら、それらA~C(D)は共通して前後の語句にかかっており、それらは共通して1つの文の要素になっていると判断する。

(ex) The man who lived next door, wrote the book and sometimes went fishing with me met with an accident yesterday.

上の英文で who から動詞の数を数えていったとき、lived と wrote と went は「A, B and C」の並列構造になっているから、これらはワンセットで1つの動詞と見なす。とすると、2つめの動詞は met であり、これが④だとわかる(もちろん⑤は The man)。訳は「うちの隣に住んでいてその本を書き、そして時々私と釣りに行った男性が昨日事故に遭った」。

Rule-12

等位接続詞を見かけたら、まずその等位接続詞の右側から攻めていくといい。つまり、まず右側の構造(形)に着目し、それと同じ構造になっている箇所を(等位接続詞の)左側に探してみるという手順で読み進めていく。

(L・B48ページ)

(ex) Nancy always blames and never praises her children.

上の英文の場合、その右側とは never praises という「副詞+(3単現のsのついた)動詞」。これと同じ構造を左側に探す。すると always blames が見えてくる。これらが and よって結ばれ、Nancy と her children は、共通の⑤とO(目的語)になっている。訳は「ナンシーは、自分の子供達をいつも責めてばかりで、決してほめない」。

Rule-13

- 異なる品詞[形]同士でも、文中の機能が同じなら、(機能優先で)等位接続詞によって結ばれることがある。
- 結果として等位接続詞によって結ばれているもの同士が、等しい構造にならないことがある。

(ex) I walked slowly and with great care.

ゆっくりとしかも大変な注意を払って歩いた

上の英文では副詞(slowly)と前置詞句(with great care)と、構造は異なるがどちらも動詞(walk)を修飾する副詞の機能を果たしているので、**構造や品詞よりも機能を優先して and によって結ばれている。** (L・B 53ページ)

Rule-14

等位接続詞の後ろが「不完全な形」で、その意味がとりにくい場合、同構造になっているその直前の文(箇所)を参考に、繰り返しによる省略によって生じた「不完全な形」を元の「完全な形」に戻してみる(Rule-49も参照のこと)。

(L・B 55ページ)

(ex) The sun shines in the daytime and the moon at night.

昼間は太陽が輝き、夜は月が輝く

上の英文の場合、等位接続詞の and の右側が不完全な文構造。そこで and の左側を参考に、省略を補えば、the moon shines at night. となる。

Rule-15

- and によって結ばれる両者が意味的に同類にならない場合、and の後ろに副詞が省略されている可能性が高い。

(L・B 58～61ページ)

① and (also) : しかも、また

② and (so/ therefore) : それゆえ

③ and (then) : それから

④ and (yet) : しかし ☞ 特に直後にyetの省略されたandには要注意。字面はandでも、意味的にはbutと同じ。

(ex) She worked hard and (yet) she failed.

彼女は一生懸命働いたが失敗した

したがって、and の前後が意味的に「同類」にならない場合、上記のような「and+(副詞)」の可能性を考えてみると良い。

- but や or も、「しかし」「又は」以外に複数の意味を持つので注意が必要。

(ex) A bat is not a bird but a mammal. コウモリは鳥でなくほ乳動物だ

☞ 「not A but B」で「AではなくてB」。

I will go, rain or shine, to the convention. どんなことがあっても大会に行きます

☞ A or B が(カン等)にはさまれ挿入的に用いられると「AであろうとBであろうと」という意味の副詞句になる(rain or shine で「雨が降ろうが雪が降ろうが ⇒ どんなことがあっても」)。

(ex) He will do that, whether you object to it or not.
君が反対しようとしまいと、彼はそれをするだろう

上の英文は He~that までで文の骨組みは終わっており(SVO)、whether節は文型から外れていると判断できる。

3.形と意味

Rule-18

SV(第一文型)の意味の類推法

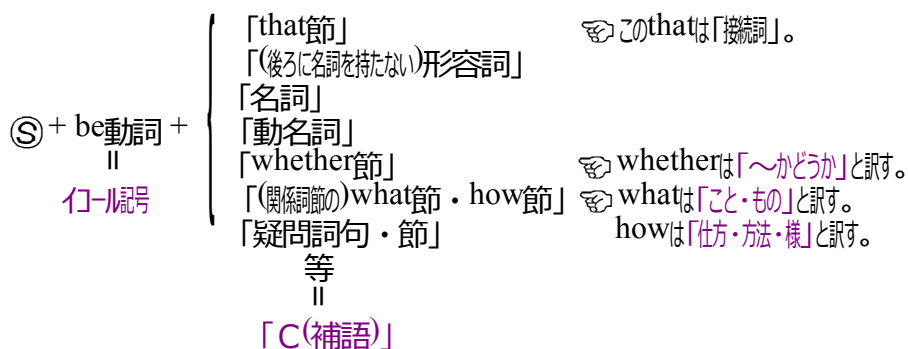
☞これについては「特別講義(45ページ~)」を参照せよ。

Rule-19

SVC(第二文型)の見極め法

(L・B69ページ)

「㊟+be動詞」の後ろに「(後ろに名詞をもたない)形容詞」「名詞」「動名詞」「that節」「whether節(〜かどうか)」「疑問詞節」などがあつたら、それらはCとみてほぼ間違いない。be動詞は「イコール記号」と考えたらいい。



Rule-20

SVC(第二文型)の意味の類推法

(L・B86ページ)

「SVC」構文を作るすべての動詞は、be動詞、又はbecome(つまり「〜である」「〜になる」)で置き換えることができる。

(ex) Tom lay awake all through the night.

上の英文で、awakeは「目を覚ました、起きている」という意味の形容詞。でこのawakeは直前直後にかかれる名詞がないのでCだと見ることができる。つまり全体は第2文型(SVC)。ならばlayをbe動詞の過去形のwasに置き換えて見れば良い(layに3単現のsがついていないところから過去形だとわかるから)。すると「トムは一晩中起きていた」という訳がカンタンに見えてくる。

SVO(第三文型)の意味の類推法

(L・B90ページ)

1.SVO構文の意味の基本は「Sが(は)Oに対して働きかけ(行為・影響・注目等)を行う」。

◎別の言い方をすれば、「OにまでSの働きかけ(行為・影響・注目等)が(直接的に・全面的に)及ぶ」ということ。

SVO構文に関しては、目的語によっては、(その目的語に対して働きかける)動詞の種類、意味を文脈・状況・常識から類推したり限定できてしまうものもある。

類推する際の考え方(手がかり)として、日常生活の基本動作(「言う」「思う」「見る」「わかる」「作る」「壊す」「する[行う]」「出す」「取る」「触れる」等)のどれかを当てはめてみるといいことが多い、ということも覚えておくといい。

2.SVO(=that節)の訳し方。

- (1)「SVO」構文で、「O」がthat節だった場合、「V」の意味は「言う」「思う」「みなす・考える」「知る[分かる]」のいずれかである。

(ex) He acknowledged that he had made a mistake.

彼は自分が間違いを犯していたことを(しぶしぶ)認めた

たとえ acknowledge が「~を(しぶしぶ)認める」という意味だとわからなくても that節を目的語にとっているくらいは誰でもわかる。ならば上記のルールを使って「言った」と訳してしまえば、意味はそう変わらない。

- (2)ただし「S」が「物・事」の場合は、「示す」と訳した方がいいこともある。

(ex) Her silence implied that she was angry with me.

彼女の沈黙は彼女が私に腹を立てていることを暗に意味していた

たとえ imply が「~を暗に意味する」という意味だとわからなくても、that節を目的語にとっており、更に主語が her silence(彼女の沈黙)と、「物事」なので、「~を示した」と訳してしまえばいい。

SVO₁O₂(第四文型)の意味の類推法

(L・B93ページ)

「SVO₁O₂」を作る動詞は、基本的に「SはO₁にO₂を与える」という意味になる。

(ex) I'll stand you a dinner. 君に夕食をおごってあげよう

「stand O₁O₂:O₁にO₂をおごってやる」という語法を知らなくても、standの後の2つの名詞「君(you)」と「夕食(a dinner)」が内容的にイコール関係にならないので「SVO₁O₂」だと判断できる。だとすれば「O₁にO₂を与える」型で訳せてしまうのでは、と考える。実際、「おごってやる」というのは「金を払って(食事を)与えてやる」ということだ。

◎ただし「AにBを与えない」「AからBを奪う・取り除く」という意味になる例外的な動詞もあるので注意。これらは少数ではあるが受験では頻出!

・deny A(人) B(物) :AにBを与えない(使わせない) ・cost A(人) B(生命・仕事・犠牲) :AからBを奪う

・spare A(人) B(苦勞等) :AにBを与えない ・cost A(人) B(金額・費用) :AからBを奪う(取る)

・save A(人) B(勞力) :AからBを取り除く ・take A(人) B(時間など) :AからBを奪う(取る)

・charge A(人) B(金) :AにBを請求する

spareには「AのためにBを割いてやる」という「与える」型の用法もあるので注意。

① Could you spare me a few minutes? 少し時間をとってくれませんか

② I will spare you trouble. あなたにご迷惑はかけません

①は「AにBを与える」型のspare。②は「AにBを与えない」型のspareの用例。

その他として「envy A(人) B(物事):AのBをうらやむ」「wish A(人) B(幸せ・挨拶):AのB(幸せ)を願う、AにB(挨拶)を言う」などがある。

Rule-23

SVOC(第五文型)の意味の類推法

(L・B96~98ページ)

1. 「SVOC」構文の「O」と「C」には意味上、「主語と述語の関係(「OはCする(される) / になる / である)」が成立している。

(ex) I told him to clean the room. ⇨ O(him)とC(to clean)は、意味の上で「主語と述語」の関係。
「私は、彼がその部屋を掃除するように言った」
(主) (述)

2. 「SVOC」構文の訳し方は、「V」の種類によって2種類に分類できる。

(1) 「V」 = 「知覚動詞」 ⇒ (OとCに「主語と述語」の関係があることを意識して)左から右に直訳すれ
「思考動詞」 ばい。

(ex) I saw him go into the room. ⇨ 「私は見た → 彼がその部屋に入るのを」と左から右に直訳すれば意味は取れる。
S V O C (主) (述)

(2) 「V」 = 「その他」 ⇒ 「Sが原因となって(Sのおかげで・せいで/Sによって)、結果としてOはCする」と訳せばいい。

(ex) His Constant effort enabled Jack to succeed in the business world.

☞直訳は「ジャックの不断の努力は、彼が実業界で成功することを可能にした」だが、「不断のおかげで(結果として)ジャックは実業界で成功した」と訳せば、enableがたとえわからなくても大丈夫。

3. 「SVO (to) do[原形]～」型や「SVO into doing～」型は、「SはOが～する方向に仕向ける」と訳してもいい。

(ex) I got my husband to stop smoking.

☞直訳は「私は夫にたばこをやめさせた」だが、「私は夫がたばこをやめる方向に仕向けた」と訳せば、使役動詞のgetがたとえわからなくても大丈夫。

Ted persuaded Jack into joining the club with him.

☞直訳は「テッドは、ジャックに自分と一緒にそのクラブに入会するよう説得した」だが、「テッドは、ジャックが自分と一緒にそのクラブに入会する方向に仕向けた」と訳せば、persuadeがたとえわからなくても大丈夫。

4. ならば「SVO from[out of] doing～」型は、その逆と考えて「SはOが～しない方向に仕向ける」又は「Sが原因となって[Sのおかげで / Sのせいで]、結果としてOは～しない / できない」と訳せる。

(ex) An accident prohibited her from attending the ceremony.

☞直訳は「ある事故は彼女がその式に出席することを妨げた」だが、「ある事故のおかげで、(結果として)彼女はその式に出席できなかった」と訳せば、prohibitedがたとえわからなくても大丈夫。

《SVOCをとる動詞とそのCのバリエーションのまとめ》

Cのバリエーション	それをCに取ることのできる動詞
原形	使役動詞(make, let, have)・知覚動詞・help <small>動詞の原形をCにとるのは上記のみ。それだけこの5種類の動詞の語法はしっかりおさえておきたい。</small>
形容詞	make・keep・leave・like・wish・paintbelieve・think・find drive・have[使役]・get[使役]・set等
現在分詞	知覚動詞・have[使役]・get[使役]・keep・leave・find・want[否定文で]等
過去分詞	全ての「SVOC構文」は、OとCの意味関係が受身(OはCされる)になる場合、Cには過去分詞が入る。

Rule-24

「言う」「思う[みなす]」「知る[分かる]」型の動詞が後ろにとる形

(L・B100ページ)

$\textcircled{S} + \textcircled{V} + \left\{ \begin{array}{l} \text{that } S + V \sim \\ \text{O} \\ S + V \sim \\ \text{O} \\ \text{" } \sim \text{"} \\ \text{O (セリフ)} \\ A \text{ as } B \\ A \text{ to be } B \end{array} \right.$

- ☞ 「 $\textcircled{S} + \textcircled{V} + (\text{that}) S + V \sim$ 」となる場合、先頭の \textcircled{S} が「物・事」を表している場合には、 \textcircled{V} は「示す」と訳した方がいいことが多い。
- ☞ 接続詞のthatが省略された結果、「 $\textcircled{S} + \textcircled{V} S + V \sim$ 」といった構造になることもあるが、訳し方は同じでいい。
- ☞ セリフを目的語にとる \textcircled{V} の場合、「言う」と訳すことが多い。
- ☞ as to beは、前後をイコールで結び記号と考える。「A as [to be] B」の部分は、「AはBだと」(つまり「A=Bだと」と訳す。でこの場合、 \textcircled{V} は「思う(みなす)」と訳すことが多い。

(1)「言う」
 (2)「思う(みなす・考える)」
 (3)「知る(分かる)」

Rule-25

その他の形から類推できる意味のまとめ

(L・B100～102ページ)

1. 「 $\textcircled{S} + \textcircled{V} + \textcircled{O} + \text{that } S + V \sim$ 」は「 \textcircled{S} は \textcircled{O} に～を伝える[知らせる]」と訳せばいい。

(ex) They warned me that the road had not been used for many years.

直訳は「彼らは私にその道路は長年使用されていないと注意してくれた」だが、「彼らは私にその道路は長年使用されていないと知らせてくれた」と訳せば、warnがたとえわからなくても大丈夫。なお、thatは省略されることもある。

2. 「 $\textcircled{S} + \text{be動詞} + \text{過去分詞} \cdot \text{形容詞} + \text{that } S + V \sim$ 」、 $\textcircled{S} + \text{be動詞} + \text{oneself} + \text{that } S + V \sim$ は、「 \textcircled{S} は～だと知っている[思っている]」と訳せることが多い。

(ex) He is certain that she will recover.

直訳は「彼女がきっと回復するものと彼は確信している」だが、「彼は彼女が回復すると思っている」と訳せば、be certainがたとえわからなくても大丈夫。なお、1.と同様、thatは省略されることもある。

(ex) I am convinced that he is guilty.
 =I convince myself that he is guilty.

☞直訳は「私は彼が有罪であると確信している」だが、「私は彼は有罪だと思っている」と訳せば、be convincedがたとえわからなくても大丈夫。

3. 「It is + p.p. + that S + V ~」という仮主語構文の意味はたいてい以下の3種類であることが多い。

- ① 「~だと言われている・報じられている」
- ② 「~だと思われる[ている]・みなされる[ている]」
- ③ 「~だと示される[ている]」

(ex) It can be concluded that we all seek for happiness.

☞「我々はみな幸福を探し求めていると結論づけることができる」。つまり「~だとみなされる(みなすことができる)」で訳せる。

4. 「~, ㊦ + ㊧.」 「~, ㊦ + ㊧, ~」型の㊧は seem, hear 以外なら「言う」「思う」と訳せばいい。

(ex) There would be an earthquake, the scientist predicted.

☞「その科学者は地震が起こると予言した」。つまりpredictedは「言った」で訳せる。

5. 「~, ㊧ + ㊦.」 「~, ㊧ + ㊦, ~」型の㊧は「言う」と訳せばいい。

(ex) Loneliness causes sadness, noted one researcher.

☞「孤独が悲しみを引き起こす、とある研究者は言及した」。つまりnotedは「言った」で訳せる。

Rule-26

動詞とその後に続く形からの意味の類推法

(L・B 110~115ページ)

1. 「動詞 + A with B」型。

(1) 「AにBを与える」

(2) 「AをBと結びつける」

☞もちろん「A with B」のwithが「~と一緒に」「~をもって」等という意味の場合もあるので、注意は必要。

2. 「動詞 + A for B」型。

(1)[A for B のforが「理由のfor」だった場合] ⇒ 「賞罰」を表す動詞がくることが多い

(2)[A for B のforが「イコールのfor」だった場合] ⇒ 「交換する」「みなす」型が多い

3. 「動詞 + A of B」型。

(1) 「A()からBを取り去る[取り除く]」

(2) 「B()にAを求める」

(3) 「A()にB(情報・考え・記憶・警告等)を与える」

4. 「動詞 + A from[out of] B」型。☞「Aが(を)Bから離れる(離す・別れる)方向に向ける」が意味の基本。

(1)「動詞 + A + from[out of] doing ~」 「Aが~しない[できない]ようにする」

☞これは、要するに先程の「S+V+O+from doing ~」タイプ。「Sが原因となって結果としてOは~しない/できない」と訳してもいい。

- (2) 「AとBを区別する」
- (3) 「BからAを得る[出す・分ける]」

5. 「動詞 + A on B」型。

「AをBに与える[Bの上に置く]」

6. 「動詞 + A into B」型。

- (1) 「AをBに変える」
- (2) 「AをBの中に入れる」 = 動詞 + A in B

7. 「動詞 + A to B」型。

- (1) 「AをBに与える[伝える、加える]」「AはBのせいだと考える」
- (2) 「AをBに連れてゆく[くる、もたらす]」「AをBに合わせる」
- (3) 「AをB(状態・性質)に変える[にする]」

このうち「与える」型が一番多い(約60%)。「もたらす」型が約30%。
一言でいえば「A to B」を後ろにとる動詞は、AからBへの「移動・変化」を表す動詞が多いといえる。

8. 「動詞 + A as B」型。

「[AはBだ(A=Bだ)]とみなす[思う]/言う」 A = B ※・「A as B」は「A=B」と考えよ。
・「みならず」と訳す動詞の方が多い。

9. 「動詞 + A off B」型。

「AをBから離す[遠ざける]」

Rule-27

受動態のまとめ

(L・B 116ページ)

1. 受動態とは「元の(能動態の時の)英文の目的語を主語にして書き換えた文」のこと。
2. 受動態の英文の意味がうまくとれない時は、元の(能動態の)英文に戻してみるといい。
3. 受動態の英文の「be動詞+p.p.」の後ろの部分は、「目的語が1つ欠けた」構造になっている。そしてその欠けた目的語の位置に主語の名詞を移動させて、元の能動態の英文に直してみる。

(ex) We are burdened with heavy taxes.

⚠上の英文の場合、are burdenedの後ろには目的語が欠けている。主語のWeを目的語の位置に戻せば「burden us with heavy taxes」が見えてくる。「動詞+A with B」となるので「AにBを与える」型と判断し、「我々は重税を与えられて(課せられている)」と訳せばいい。

Rule-32

1.不定詞が条件を表す場合、主節に推量の助動詞(will[would], may[might], can[could])等があることが多い(逆に「強制力の強い動詞」が主節の○なら、その不定詞句は「目的(～するために)」の可能性が高い)。

2.その場合、その不定詞部分は「もし～(なら)」と訳せばいい。

(ex) To say it carelessly, you may be misunderstood.

もし不注意にそんなことを言ったら、君は誤解されるかもしれないよ

(L・B129ページ)

Rule-33

be to 構文

(L・B134ページ)

1.be to構文か、単なる「SVC」かの見極め方は、be動詞をはさんで

(1)前後がイコール関係になる ⇒ 「SVC」

(ex) My dream is to be an actor. ⇔ 「My dream = to be an actor」なのでSVCとわかる。
私の夢は役者になることです

(2)前後がイコール関係にならない ⇒ be to構文

(ex) You are to come here on time. ⇔ 「You ≠ to come」なのでbe to構文とわかる。
君はここに時間通りにこなければならぬ

2.be to構文は、助動詞の will, can, should[must] のどれかでたいてい言い換えることができる。

3.be to構文の表す意味。

①予定 「～する予定になっている」

これは助動詞の will と同じで未来を表す。したがって未来を表す副詞(句)と共に用いられることが多いのが特徴。

(ex) The concert is to begin at seven.
コンサートは7時に始まる予定になっています

②運命 「～する運命になっていた」

これは「予定」の be to が過去時制で用いられたもの。never とセットで用いることも多い。その場合の訳し方は「決して～することはなかった」となる。

(ex) Mr.Brown was never to see his home town again.
ブラウンさんは二度と故郷を見ることはなかった

③可能 「～できる」

これは助動詞の can と意味は同じ。主に否定文で使われることが多く、「be to+be+p.p.～」と言う形になることも多い。

(ex) The ring was not to be found. その指輪は見つからなかった

④意図(思) 「～するつもりだ」

たいてい if 節の中で用いられる。

(ex) If you are to succeed in anything, you have to make a good start.

どんなことでも成功するつもりなら、良いスタートを切らないといけない

⑤命令・義務 「～すべきだ」 「～しなくてはならない」

これは助動詞の should, must と意味は同じ。実は be to 構文が一番多いのが「命令・義務」をあらわすもの。だから英文中で be to 構文に出くわし、なおかつ意味を特定する目ぼしいヒントが見当たらない場合、まず「命令・義務」で訳してみるという。

(ex) You are to pay your debt as soon as possible.

借金はできるだけ早く返さなければいけない

Rule-34

準動詞の完了形の表す意味

(L・B 141・148・156ページ)

準動詞の完了形(to have+p.p. / having+p.p.)は、全て主節の動詞よりも1つ前(昔)の内容(時制)を表す。

1.完了不定詞(to have+p.p.~)。

(ex) He seems to have been ill. 彼は病気だったようにみえる

上の英文の to have been は、主節の動詞(seems[現在時制])よりもひとつ前の時制、つまり「過去」の内容を表している。

④単純不定詞(to do[原形]~)は、主節の動詞と同じかそれよりも未来の内容(時制)を表す。

2.完了動名詞(having+p.p.~)。

(ex) She is proud of having been a famous actress when she was young.

彼女は若いころ、有名な女優だったことを自慢に思っている

上の英文の having been は、主節の動詞(is[現在時制])よりも1つ前の時制、つまり過去の内容を表している。

④単純動名詞(doing~)は、主節の動詞と同じかそれよりも未来の内容(時制)を表す(remember, forget等は例外)。

3.完了分詞(having+p.p.~)。

(ex) Having caught cold, he is absent from school today.

風邪をひいたので、彼は今日学校を休んでいる

上の英文の Having caught cold は、主節の動詞(is[現在時制])よりも1つ前の時制、つまり過去の内容を表している。

④単純分詞(doing~)は、主節の動詞と同じ内容(時制)を表す。

Rule-35

準動詞とその意味上の主語

(L・B 138・145・157ページ)

1.不定詞の場合。

文中の for A(名) to do[動]~ という構造の「A」と「to do~」の間には、意味上「主語と述語の関係」が成立している(「A」=意味上の主語)。

(ex) For you to study hard is important. 君が一生懸命勉強することが大切だ
(主) (述)

2.動名詞の場合。

文中で動名詞の前に「所有格」「目的格」「名詞」のいずれかがついていたら、それらと動名詞との間には、意味上「主語と述語の関係」が成立している(「(動名詞の前に置かれた)所有格・目的格・名詞」=意味上の主語)。

(ex) I insisted on his[him] going there. 私は、彼がそこに行くことを主張した
(主) (述)

I insisted on Jack paying for it.
(主) (述)

私はジャックがその支払いをするよう主張した

3.分詞の場合。

分詞構文の分詞句の前に置かれた名詞と直後の分詞とは、意味上「主語と述語の関係」が成立している(「(分詞の前に置かれた)名詞」=意味上の主語)。

(ex) John returning safe, everybody was relieved.
(主) (述)

ジョンが無事戻ったので、みんなはほっとした

4.準動詞(不定詞・動名詞・分詞)に意味上の主語がついていない場合、文の主語、つまり主節の主語がその(不定詞・動名詞・分詞)の意味上の主語であると判断する。

亶ただし「一般の人」が意味上の主語である場合や、意味上の主語が文脈から明らかかな場合も、意味上の主語は明示されないことがあるので注意は必要。

Rule-36

文中の「名詞+doing~」の可能性

(L・B170ページ)

文中で動名詞も現在分詞も、直前に名詞を伴って「名詞+doing~」という構造になることがある。文中に現れた「名詞+doing~」が「名詞+動名詞」なのか、それとも「名詞+現在分詞」なのか、瞬時にその区別がつくようにならない。

1.「名詞+doing~」が「名詞+現在分詞」だとみなせる3パターン。

(1)現在分詞の後置修飾(現在分詞が後ろから直前の名詞を修飾している場合)。

(ex) The man standing at the gate is my boyfriend.
名詞 ↑ 分詞

門の所に立っている男の人は私のボーイフレンドです

(2)分詞構文において「名詞」が直後の分詞の意味上の主語になる場合。

(ex) Jack returning safe, we were relieved.
名詞 分詞

ジャックが無事戻ったので、私達はホッとした
主語 述語

Nancy was reading the letter with tears running.
O(名詞) C(分詞) with O C:「OがCの状態」
ナンシーは涙を流しながらその手紙を読んでいた
主語 述語

(3)第5文型のCに現在分詞が入る場合。「S + V + O(名) + C(現在分詞)」。

(ex) I saw Tom helping his mother to carry it.
O(名詞) C(分詞)

私はトムが、お母さんがそれを運ぶのを手伝っているのを見た
主語 述語

2. 「名詞+doing～」が「名詞+動名詞」だとみなせるのは、「名詞」の部分が、動名詞の意味上の主語になる場合。

(ex) I insisted on Jim doing it alone. 私はジムがそれを一人ですよう主張した
名詞 動名詞 主語 述語

上例の場合、doing は現在分詞で Jim を修飾していると見ると「それを一人でしているジムを私は主張した」と意味不明な英文になってしまう。
動名詞なら、その働きは「主語・目的語・補語」や準動詞・前置詞の目的語等になること。そこで上例の doing は動名詞で、Jim ~ alone まで全体が前置詞(on)の目的語になっているとみると文意が成り立つ。

Rule-37

分詞構文のタイプとその訳し方

(L・B160ページ)

1. 分詞構文のタイプ(with O Cを除く)。

(1) Doing~ }
p.p.~ } , (S)+(V) ...
(形)~ }

(2) ~, { doing~ } , ~
{ p.p.~ }
{ (形)~ }

(3) (S)+(V) ..., { doing~ }
{ p.p.~ }
{ (形)~ }

2. 分詞句が文頭、文中盤((1)、(2)のタイプ)の訳し方。

- ①[時] 「～のとき(間)」 「～(しようと)する」と 「～につれて」 「～した後」 等
- ②[理由] 「～なので」 「～により」
- ③[条件] 「もし～なら」
- ④[譲歩] 「～だけれど」 「たとえ～としても」

のどれかで訳す。①～④の順番通り覚える。なぜなら「時」で訳せる場合が最も多い。次が「理由」、その次が「条件」。「譲歩」の可能性は最も低いから。

3.分詞句が文章後半にあった場合(3)のタイプ)の訳し方。

- ①[連続]「そして～(する)」
- ②[同時]「～しながら」

(ex) The man took a step forward, singing a song for her.
 その男性は一步前に進み出て、そして彼女のために歌を一曲歌った

The boys sat on the grass, looking at the setting sun.
 少年たちは沈んでいく夕日を眺めながら、草の上に座っていた

もちろん文章後半でも「時」「理由」「条件」「譲歩」のいずれかで訳した方がいい分詞句もある。また文章前半や中盤の分詞句を「そして～」「～しながら」と訳した方がいいこともあるので文脈によって臨機応変な対応は必要。

4.特に過去分詞や形容詞で始まるような分詞構文には注意せよ。ただ訳し方のルールは、普通の分詞構文と同じ。

(ex) Seen from a distance, the rock looks like a human face.
 遠くから見るとその岩は人間の顔のように見える

Unable to operate a computer, he couldn't be hired.
 コンピュータの操作ができなかったので、彼は雇用されなかった

5.with O C構文。

(英文中のwithを含む前置詞句が)with O C構文かどうかは、以下の2点が見極めのポイントになる。

- ①「with+名詞」の後ろに「形容詞」「分詞」「副詞」「前置詞+名詞」のいずれかがあがる。
- ②「(withの後ろの名詞)」とそれら語句との間に「主語と述語の関係」が成立している。

with O C構文の基本は「OがCの状態」。それでうまく訳せない時は、「時(～の時、(し)たら)」「理由(～ので)」「条件(もし～)」「譲歩(～けれど、としても)」「そして～(する)」「～しながら」の6種類のうちから文脈に則して適当なものを選ぶ。

(ex) With night coming on, they started home. ☞ with O Cを「時」として訳している。

O C

夜になってきたので、彼らは家路についた

5.倒置・語順変化(文の要素の移動)

Rule-38

「(準)否定の副詞(句・節)」の倒置の公式
 (L・B 2 2 3ページ)

(準)否定の副詞(句・節)

+

疑問文と同じ語順
[主節]

(ex) In no circumstances will I allow you to go there.
 いかなる事情があろうと、私は決してあなたがそこへ行くことを許さない

上の英文のように、(動詞を修飾する)「(準)否定の副詞(句・節)」が文頭に飛び出すと、主節は疑問文と同じ語順になる。
 更に、このルールを逆に利用して「(準)否定の副詞(句・節)」が文頭に飛び出した英文に出くわした場合、「疑問文と同じ語順になっている箇所」がその英文の主節だと判断するとよい。元々の主節がどこから始まっているのかが分かれば、それよりも左側は「(文頭に移動した)否定の副詞(句・節)」だと、簡単にこれまた判断できる。

(ex) Not until we lose our health do we realize its value.

健康を失ってはじめてそのありがたさがわかる

上の英文でも、疑問文の語順になっている下線部が主節。そしてそれより左側の Not~health までが(文頭に移動した)否定の副詞節だと、これで簡単に判断できる。

また解釈などでは、「not only A but also B: A だけではなくて B もまた」の構文で not only が文頭に出て、A に当たる部分が「疑問文の語順」になるというパターンがよく出題される。

(ex) Not only does Tom say what should be said but also he does what should be done.

トムは言うべきことを言うだけではなく、やるべきこともまたやる

Rule-39

M(一般の副詞)を強調する倒置の公式

(L・B 226 ページ)

1. M + (V) + (S)

(ex) At the foot of a hill stands our school.

M (V) (S)
 丘のふもとにわが校は建っている

2. M + (S) + (V) (主語が代名詞の場合)

(ex) Down it came. それ落ちてきた

M (S) (V)

ⓂMには「場所(時)を表す副詞」「運動の方向を表す副詞(up, down, in, out, off 等)」等がくることが多い。

Rule-40

SVCの倒置の公式

(L・B 228 ページ)

1. C + (V) + (S)

(ex) Happy are the people who love flowers. 花を愛する人は幸いである

C (V) (S)

2. C + (S) + (V) (主語が代名詞の場合)

(ex) Right you are. 君が正しい

C (S) (V)

3.特に、以下の2つの構文については「so～」 「such」が文頭に飛び出すと、主節は疑問文と同じ語順になり、受験では頻出。

① ㊸+㊹+ so ~ that S + V... : ㊸はとても～なので…する

(ex) So strong was his belief that he would never change his mind.
彼の信念はとても強かったので彼は決心を決して変えなかった

㊸元々は His belief was so strong that～. という語順だった。

② ㊸+be動詞+ such that S + V...: ㊸は大変なものなので…する

(ex) Such was his anger that he became ill.
彼の怒りは大変なものだったので、彼は病気になってしまった

㊸元々は His anger was such that～. という語順だった。

Rule-41

O(目的語)を強調する語順変化

(L・B231ページ)

1. 「㊸+㊹+O」のOが文頭に飛び出すと全体は「O+㊸+㊹」の語順になる。

(ex) This trip to Hokkaido, I will never forget.
O ㊸ ㊹
今回の北海道旅行を私は決して忘れないだろう

2. 「㊸+㊹+O₁O₂」のO₂が文頭に飛び出すと全体は「O₂+㊸+㊹+O₁」の語順になる。

(ex) Whether he will come or not I cannot tell you.
O₂ ㊸ ㊹ O₁
彼がくるかどうかをあなたにお伝えできません

3. 「㊸+㊹+O+C」のOが文頭に飛び出すと全体は「O+㊸+㊹+C」の語順になる。

(ex) Any person I consider a coward if he does nothing in that situation.
O ㊸ ㊹ C
もしそのような状況で何もしないのなら私はどんな人であれ、(その人を)臆病者とみなします

㊸要するに、O(目的語)が文頭に出ても倒置(S+V → V+S)は起きない。ただし目的語に否定語(又はそれに準じる語)がついて文頭に移動した場合は、主節は疑問文と同じ語順になる(つまり倒置が起きる)。

(ex) Not a word did I say. 私は一言もしゃべらなかつた
O 「疑問の語順」

㊸SVOCの場合「CSVO」のパターンは、ないわけではないが数は少ない。

Rule-42

So+V S / Neither[Nor]+V S

(L・B234ページ)

1. S₁+V～ ⇒ So+V+S₂
「S₁は～だ」[肯定] 「S₂もまた～だ」

(ex) He holds a masters degree. So do I. 彼は修士号を持っている。私もだ。
V S

2. S₁+not+V~ ⇒ Neither[Nor]+V+S₂
「S₁は~ない」[否定] 「S₂もまた~でない」

(ex) I will not go shopping. Neither[Nor] will Mary.
V S

僕は買物には行かない。メアリーも行かないだろう。

⊕Neither[Nor]/Soの後ろが「完全な疑問文」の形になることもある。

(ex) Brian Smith had no money, nor did he know anyone he could borrow from in this strange town.

ブライアン・スミスは金を全然持っていなかったし、また金を借りられる人もこの見知らぬ町では知らなかった

Rule-43

仮定法におけるif節の倒置

(L・B236ページ)

1. 仮定法のif節(条件節)のifが省略されると、その条件節は「疑問文と同じ語順」になる。

(ex) Could I see him once more, I would be happy.

=If I could see him once more

もし彼にもう一度会うことができればうれしいのですが

2. 見極めのポイントは以下の2つ。

(1) 主節に「助動詞の過去形」「助動詞の過去形+have+p.p.~」がある。

⊕ただしIf節にshouldが入る仮定法(もし万一~なら)の場合、主節に、「助動詞の過去形」がこないこともあるので注意。

(ex) Should anyone call me, please take a message.

=If anyone should call me, please take a message.

もし万一誰かから電話があったら、伝言をきいておいてください

(2)?(クエスチョン・マーク)が文末にないのに、疑問文の語順になっている節が文中にある。

この2つのポイントがあてはまる英文に出くわしたら、(仮定法の)ifの省略を疑ってみる。

Rule-44

There + be動詞/一般動詞 + S(名詞)構文

(L・B239ページ)

1. 「There is ⊙ + 分詞~」となる場合は「⊙は(が)~している(される)」と訳すといひ(つまり⊙と分詞~の間には「主語と述語の意味関係」が成立している)。

(ex) There was a car coming up the hill. 車が丘を登ってきた

上例でも a car と coming up は(「動」登ってくる)と主語と述語の意味関係になっている。

2. 「There+㊦(一般動詞)+㊤」となる場合の㊦(一般動詞)には come, live, exist remain, stand 等、「存在・往来」を表す動詞がくることが多い。

(ex) There stands a castle on the hill. 丘の上に城が建っている

訳す場合には(There は削って)、A castle stands on the hill. と、頭の中で「㊤+㊦」の語順に戻して訳せばいい。

Rule-45

比較級の as 以下、than以下の倒置

(L・B239ページ)

than や as の後ろの「S+V」の「S」が長すぎる場合(や比較の対象同士を明確にしたい場合に)、SとVがひっくり返って「V+S」となることがある。

(ex) He loves her more than does his big brother.

V S

兄が愛するよりもっと彼は彼女のことを愛している

㊤ as や than の後ろの do[does/did]のほとんどは(直前の一般動詞の繰り返しを避ける)代動詞。上の英文でも does = loves (her)。

Rule-46

SVOC ⇒ SVCO

(L・B240ページ)

「S+V+O+C」が(Oが長すぎる場合に)、「S+V+C+O」の語順になることがある。

(ex) Don't leave undone what you should do.

㊦ C O

やるべきことをやらずに置くな ⇒ やるべきことをやりなさい

㊤ この手の語順変化(文の要素の移動)を見抜くには、動詞の語法についての知識が不可欠。上の英文も「leave O(名) C(形・名・分) : OをCのままにしておく」という語法を知らないと読み解くことは不可能。

Rule-47

SVOM ⇒ SVMO

(L・B242ページ)

「S+V+O+M(副詞)」が(Oが長すぎる場合に)、「S+V+M(副詞)+O」の語順になることがある。

(ex) He added to his tea a little sugar and milk.

彼は紅茶に砂糖とミルクを少し加えた

㊤ 上の英文は「add A to B: AをBに与える」が「add to B A」の語順になっている。his tea が「B」、a little sugar and milk が「A」。

この手の語順変化(文の要素の移動)の見極め法として、「V+(前)+A(名)」という

構造の後に、S・O・Cといった特定の役割を持たない「名詞」を発見したら、「S+V+M+O」型の語順変化ではないかと疑ってかかってみるのもいい。

Rule-48

譲歩節中での語順変化

(L・B 238ページ)

1. 「**形容詞(副詞・名詞)** +as+S+V」で「Sは～だけれど」。
※「Sは～なので」という意味になることもたまにある。

(ex) Unbelievable as it was, they actually welcomed us.
信じられないことだったが、彼らは実際私達を歓迎してくれた
Child as he was, he supported his family.
子供だったけれど(子供ながらに)、彼は家族を養っていた
◎上例のように名詞が節頭に来る時は、(その名詞は無冠詞になる。

2.その他

- (1) 「**動詞+as+S+助動詞**」で譲歩(たとえ～としても)を表す。
(ex) Try as he would, he could not lift the rock.
彼がどんなにやってみても、その岩を持ち上げられなかった
- (2) 「**動詞+疑問詞+S+助動詞**」で譲歩(たとえ～としても)を表す。
(ex) Come what may, I'll be ready. どんなことがあっても私は覚悟ができています
- (3) 「**Be it (ever so)...**」で譲歩(たとえ～としても)を表す。
(ex) Be it ever so humble, there is no place like home.
たとえどんなにみすぼらしくとも、我が家に勝る場所はない
- ◎ 「動詞の原形」で始まる英文には命令文以外に、上記のような「譲歩(たとえ～としても)」の構文があり得ることを頭に入れておくといい。
ただしこれらは古風な表現で、使われる頻度はそれほど高くない。

6.省略

Rule-49

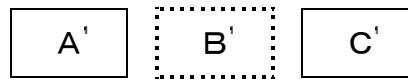
英文中で文法的に説明がつかない箇所に出会ったら

(L・B 246ページ)

1. 「省略があるのでは？」とまず考えてみる。
2. 省略というのは同じ言葉の繰り返しがあつた場合に生じるもの。
3. 直前部分で、その意味不明箇所と同構造の文を探してみる。
4. 見つかったら両者を並列して省略された部分を補ってみる。
要するに対応する語句同士がちょうど上下に並列するように頭の中で両者を並べてみる。そうすると(左側の英文にはあつて)右側の英文中にはないものが見えてくる。



④等位接続詞とはand, but, or
等のこと。



このような省略が最も生じやすいのは「等位接続詞」と「(比較の) than や as」の右側(後ろ)である(故に、「等位接続詞」「(比較の) than や as」の後ろは設問として狙われやすい。要注意である)。

Rule-50

that の省略

(L・B250ページ)

1. think, suppose, believe, say, know 等の動詞の目的語になる名詞節を導く that は特に口語調では省略されることが多い。

(ex) I know (that) she dislikes him. 私は彼女が彼を嫌いなのを知っている

Father told me (that) he would take me to the Exposition with him.

お父さんは私に博覧会に連れて行ってあげようと言った

I'm sure (that) he's innocent. 彼が無実であると確信しています

④上例のように「be動詞+形容詞・過去分詞+that S+V～」の that も省略されうる。

2. 「It ~ that ...」構文や、「SVC」構文の「C」がthat節の場合、that が口語調では省略されることがある。

(ex) It is a pity (that) he died so young.

彼がそんなにも若くして亡くなったのは残念だ

The truth is (that) he was innocent. 実際彼は無実だった

3. 強調構文の that は省略されることがある。

(ex) It is in London (that) the traffic is noisiest.

交通騒音が一番ひどいのはロンドンだ

It is the man (that[who]) killed her. 彼女を殺したのはその男だ

4. いわゆる「so~that」構文の that、「so that S+may[will/can]+do[原形]~: Sが~するために(できるように)」構文の that は省略されることがある。

(ex) He stepped aside so (that) the child could pass.

彼はその子供が通れるようにどいてあげた

場合によっては so の方が省略されることもある。

(ex) You should study hard (so) that you will be able to pass the exam.

君は試験に通ることができるよう、一生懸命勉強すべきだ

Rule-51

even の省略

(L・B252ページ)

うまく訳せない時に even を補ってあげるといい構文として、以下のようなものがある。特に1.と2.は受験では頻出。

1.最上級: 「どんなAでさえ[でも]」

(ex) (Even) The wisest man sometimes makes a mistake.
 どんな賢い人でさえ、時としてミスをすることがある

2.if 節, though 節: 「たとえ~だとしても[でも]」

(ex) (Even) If the sun were to rise in the west, my love would not change.
 たとえ仮に太陽が西から昇っても、僕の愛は変わらないだろう

(Even) Though he is the prime minister, we intend to have him recognize our complaint.
 たとえ彼が首相でも、私たちの不満を認識してもらおうつもりだ

3.after 節: 「~の後でさえ[でも]」

(ex) (Even) After I have started speaking in Japanese, some Japanese students continue to speak to me in English.
 私が日本語で話し始めているのに、それでも英語で話しつづける日本人学生がいる

4.when 節: 「~の時でさえ[でも]」

(ex) The heat didn't ease (even) when the sun went down.
 日が沈んだけれども、暑さは和らがなかった

Rule-52

「名詞+S+V」

(L・B253ページ)

名詞の後ろに直接「S+V」のついた「名詞+S+V」という構造は、

「名詞+関係詞+S+V」

の「関係詞」が省略された形である(「関係詞」とは、具体的には「関係代名詞の目的格」「関係副詞」「関係代名詞の補語格」等)。訳す際には、「S+V」部分を直前の「名詞」にかけて訳すようにするといふ。

(ex)

The man	I love
名詞	S+V

 is you. ☞ I love を直前の The man にかけて訳す。
 V C 左のように「名詞+S+V」全体を1つの
 「はあなたです」 名詞の固まりと考えてしまってもいい。
 S(名)「私が愛している人」

副詞節中の「S+be動詞」の省略

(L・B257ページ)

副詞節を導く従位接続詞の後ろの「主語+be動詞」は

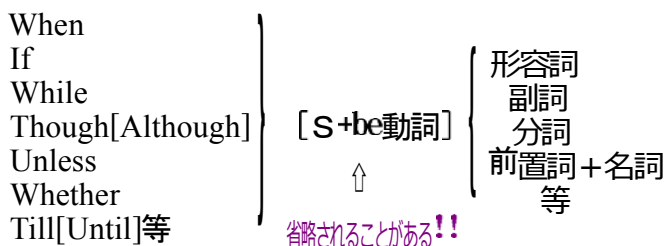
- ①その主語が、主節の主語と同一
- ②そのbe動詞の時制が、主節の時制と同じ

場合には省略されることがある。

(ex) While walking on the street, I met an old friend of mine.

通りを歩いていたら、古い友人の一人に会った

上の英文では、主節の主語はIなので、それと同じIが、また主節の動詞は過去時制(met)なので、それと同じ時制のbe動詞(was)が、whileの後ろに省略されていると判断する。⇒ While I was walking on the street, I met an ~.



このように、従位接続詞に直接「形容詞」「副詞」「分詞」「前置詞+名詞」等がかつついた構造を見かけたら、「主語+be動詞」が(従位接続詞の後ろに)省略されているのではないかと頭を働かせることが大切。

Ⓢただし例外的に「when[if] necessary(必要な場合には)」のような慣用的表現では、主語が違っても省略することもある。

Ⓢ以下の英文のように、過去と現在を対比させたような英文では、主節の動詞と副詞節中のbe動詞の時制が異なる場合も、ときにあり得る。

(ex) I am happy now though (I was) unhappy in childhood.

子供時代は不幸だったが、今は幸せだ

Ⓢwhatever, however等は従位接続詞ではないが、同じように節内の「主語+be動詞」が省かれることがある。

(ex) However small (they are), all efforts will count in the end.

どんなにささやかであれ、努力を重ねれば最後には成果が出るものだ

比較級での省略

(L・B259ページ)

1. 「the+比較級 S + V~, the+比較級 S + V...:~すればするほどそれだけいっそう…」の構文で、「V」がbe動詞やbecomeの場合、そのbe動詞(become)は省略されることが多い。

(ex) The larger the audience is, the better the profit (is[becomes]).

聴衆がたくさんであればあるほど、利益は上がる

Ⓢ「The sooner (you do it), the better (it will be):早ければ早いほどいい」のような決まり文句的なものの場合、「S+V」の部分がすべて省略されてしまうこともある。

④またthe+比較級が3つある場合は、andのない方が前後半の切れ目と判断する。
たとえば、

The+比較級 S+V~ and the+比較級 S+V~, the+比較級 S+V…

という構造の英文があったら、

The+比較級 S+V~ and the+比較級 S+V~, // the+比較級 S+V…

つまり、「~すればするほど、そして~すればするほど、それだけいっそう…」
と訳せばいい。

2. 否定の原級比較や比較級の表現で、「as~」「than~」が全て省略されている場合がある。

(1) その英文の時制が現在完了なら「今ほど」、過去完了(had+p.p.)なら「その時ほど」を補って訳すといい。

(ex) She said, "I have never been so happy."

「今ほど幸せだったことはない」と彼女は言った

⇒ 「今が一番幸せだ」と彼女は言った

(2) それ以外の時制ならば「これほど」を補って訳すといい。

(ex) Nothing could be farther from the truth.

これほど真実からかけ離れたものはない

ただし(2)の場合、「これほど」の「これ」が具体的に何を指すのかは文脈で自分で判断する。

Rule-55

those, others, many, some 等

(L・B261~263ページ)

1. 文中の(代名詞) those の可能性。

(1) 「the+people」の代用。「~な人々」と訳す。

(ex) those chosen

☞ 「選ばれた人々」と訳す。

those raised in the country

☞ 「田舎で育った人々」と訳す。

④ those who+V~で「~する人々」は頻出。

(ex) I don't like those who have no manners. マナーが悪い人は嫌いだ

(2) 「the+既出の複数名詞」の代用。

(ex) Elephants from Africa are bigger than those from India.

アフリカ象はインド象よりも大きい =the elephants from India

2. 文中の others の可能性。

(1) 「other people」の代用。「他(の)人」と訳す。

(ex) Don't trust others. 他(の)人を信用するな

(2) 「other+既出の複数名詞」の代用。

(ex) I don't like this shirt. Show me **others**[=other shirts].

このシャツは好きではありません。他の(シャツ)を見せてください

3. many, few, some, any, each, all等や、数詞、分数等の後ろにpeople(又はthing(s))が省略されていることがある。

(ex) Many (people) believe in supernatural. 多くの人が超常現象を信じている

㊦ ㊧

ただし、前の英文中に many, few, some 等が指す具体的な名詞がある場合には、**people** ではなくその(具体的な)名詞を後ろに補ってあげなければならない。これについては、those、others に対する考え方と同じ。

(ex) Of the patients, **some** were very positive.

患者の中には前向きな人もいた

上の英文の場合には、some の後ろに patients が省かれているとみるべき。

7. その他の読解ルール

Rule-56

how のまとめ

(L・B54ページ)

1. how が導く節(つまり how節)は、

- ① 文の主要素(S・O・C)
- ② 前置詞・準動詞の目的語

☞ 要するに必ず「名詞節」になるということ。

のいずれかになる。

(ex) Tell me how you felt about it. それをどう感じたのか私に教えて

㊧ O₁ O₂

2. how の訳し方は2タイプ。

- (1) how 単独の場合 ⇒
- ① 「どのように(な)○○か」「どうやって○○か」
 - ② 「○○の仕方、やり方、様子、(あり)様、(実際)状」
「(...である)ということ(の次第)」
 - ③ 「どうして」「なぜ」

(ex) Nobody remembers how she was dressed.

誰も彼女がどんな服装をしていたか覚えていない
Could you tell me how I can get to Tokyo Tower?

東京タワーにはどのように行ったらよいか(行き方)を教えてください

That was how it happened. そのようにしてそれは起こったのです

☞ This[That] is how S+V~は、「[こ]んなふうにして~」と訳すといひ。

That's how it is. そういう実状です

She told me how[=that] she had read about it in a morning paper.

彼女はそれを朝刊で読んだと話してくれた

④このように接続詞のthatで言い換え可能なhowもある。

I can't see how she sold her engagement ring.

彼女がどうして婚約指輪を売ったのか理解できない

(2)how が直後の「形容詞」「副詞」を修飾する場合 ⇒ 「どれほど(の)○○か」
「どれくらい(の)○○か」

(ex) You cannot imagine how happy she was.

彼女がどれほど幸せであったか想像できない

④のhowは「the way (in which)」「the manner (in which)」で書き換えられる。

Rule-57

文(節)頭の不定詞句の見極め法

(L・B 188ページ)

1.不定詞句の直後に「④」があれば、その不定詞句を⑤と判断し「～すること」と訳す。

(ex) To quit smoking is very hard for him. 彼にとって禁煙はとても難しい
⑤ ④

2.不定詞句の直後に「⑤+④(主節)」があれば、その不定詞句は副詞句。
意味は「～するために[目的]」「もし～なら」あるいは to be sure などの決まり文句。

(ex) To enter the university, she studied very hard.
[副詞] ⑤ ④
大学に入るために、彼女は猛勉強した

実際、上例のような「To do[願]～, ⑤+④…」型の To do[願]～の90%は、「～するために[目的]」である。

ただ「To do[願]～, 命令文…」の場合は「～するためには(もし～すれば)、…せよ」と訳す。

(ex) To get to the post office, go down Sunset Avenue for half a block.
郵便局にたどり着くためには、サンセット通りを半ブロック進みなさい
(もし郵便局に行くつもりなら)

Rule-58

文(節)頭の Doing～の見極め法

(L・B 192ページ)

1.Doing～で始まる句の直後に「④」があれば、その Doing～ を⑤と判断し「～すること」と訳す。

(ex) Learning to drive a car helped her live in the city.
⑤ ④
車を運転できるようになったことは、彼女がその街で暮らすのに役立った

2.Doing～で始まる句の直後に「⑤+④(主節)」があれば、それは副詞句。分詞構文と見る。「時」「理由」「条件」「譲歩」のどれかで訳せることが多い。

(ex) Being young, she was very energetic in those days.

〔分詞構文〕 Ⓢ Ⓧ

若かったので、その当時彼女はとても精力的だった

Ⓢただし、「Doing~ Ⓧ+Ⓢ」の倒置構文もあるので注意。

C

(ex) Standing on the hill was my brother. 丘の上に立っていたのは兄だった

C

Ⓧ

Ⓢ

Rule-59

文(節)頭の Whether節の見極め法

(L・B 195ページ)

1. Whether節の直後に「Ⓧ」があれば、そのWhether節をⓈと判断し「~かどうか」と訳す。

(ex) Whether it was true is still an open question.

Ⓢ Ⓧ

それが本当かどうかは依然として未解決の問題です

2. Whether節の直後に「Ⓢ+Ⓧ(主節)」があれば、そのWhether節は副詞節。「~であろうとなかろうと」と訳す。

(ex) Whether you like it or not, you must do it.

副詞節 Ⓢ Ⓧ

好むと好まざるとにかかわらず、君はそれをしなくてはならない

Ⓢただし、「Whether節 Ⓢ+Ⓧ」の(目的語を文頭に置いて強調した)構文もあるので注意。

O

(ex) Whether he will go there I don't know. Ⓢ knowの目的語であるwhether節が文頭に

O

Ⓢ Ⓧ

飛び出した「O+S+V」の構文。

彼がそこに行くかどうかどうか、私にはわかりません

Rule-60

文(節)頭の Who[What/Which]+ever節の見極め法

(L・B 197ページ)

1. Who[What/Which]+ever節の直後に「Ⓧ」があれば、Who[What/Which]+ever節はⓈと判断し、「~するものは誰/何/どちらでも(みな)」と訳す。要するに最後を「~でも(みな)」でまとめてしまえばいい。

(ex) Whoever finds it may keep it.

Ⓢ Ⓧ

それを見つけた者は誰でもそれを保持していてもいい

Whatever he needed was given by his parents.

Ⓢ

Ⓧ

彼が必要なものは何でも、両親によって与えられた

2. Who[What/Which]+ever節の後ろに「Ⓢ+Ⓧ(主節)」があれば、Who[What/Which]

節は副詞節と判断する。訳し方は「たとえ誰/何/どちらが[を]~しても」。要するに最初と最後を「たとえ~しても」でまとめてしまえばいい。

(ex) Whoever else objects, I am going to do it.

たとえ他の誰が反対しようとも、私はやります

Whichever book you borrow, you must return it by Friday.

たとえどちらの本をを借りても、金曜日までには返さなくてはなりません

Rule-61

同格のまとめ

(L・B202~207ページ)

1.同格とは、「名詞,名詞」という形で、後ろの名詞が前の名詞(の内容)を補足的に説明したり、言い換えたりする用法。つまり内容的には両者は「イコール関係」。

(ex) Nancy, the girl who sits next to me in class, is very cute.

ナンシー、つまり授業で私の隣に座っている女の子はとてもかわいい

④上記のような「カンマ(,)」以外に、同格表現の直前には「コロン(:)」「セミコロン(;)」 「ダッシュ(-)」 「that is (to say)」 「namely」 「(,) or」 等が置かれることが多い。これらは「即ち」「つまり」などと訳すといい。

2.実際の英文中では「名詞+名詞」以外に様々な同格のパターンがある。

④(1)(2)(3)タイプの同格は、「という」という訳をつけるといい。

(1) 「名詞+名詞節(that節やwhether節[~かどうか]・if節[~かどうか]・疑問詞節等)」の同格。

(ex) He heard the news that his team had won.

彼は彼のチームが勝ったという知らせを聞いた

(2) 「A(名詞)+of+B(名詞): BというA」の同格。

「A(名詞)+of+doing~: ~するというA」の同格。

(ex) the news of the team's victory チーム勝利という知らせ

his habit of smoking 喫煙という彼の習慣

(3) 「名詞+to do[願]~」の同格。

(ex) The ambition to succeed in the world is natural for young people.

世の中で成功するという野望は若者には当然のものだ

(4) 「文+名詞」の同格。

(ex) Ted married a young lady recently — the talk of this neighborhood.

テッドは最近若い女性と結婚した — このかみわいではその話でもちきりだ

このタイプの同格の場合、「名詞」の前に「接続詞+it is[was]」を補ってみるといい。上例も and it is を the talk の前に補ってみるといい。

(5) 「副詞(句・節)+副詞(句・節)」。

(ex) Now, We are here in America. 今や、私達はここアメリカにいる

(副) (副)

(6) 「節+節」の同格。

(ex) Her life gave him the courage to hope that he didn't have to obey his parents, that he could create his own future.

彼女の人生は、彼は両親に従う必要はないということ、つまり彼は自分の未来を切り開くことができるということを望む勇気を与えてくれた

上の英文では、下線部の that 節が、前の that 節を言い換える同格節となっている。

Rule-62

カンマ(,)の用法のまとめ

(L・B212~214ページ)

1.並列のカンマ

(ex) To study hard, to play a lot are important.

よく学びよく遊ぶことが大切だ

上の英文では To study hard と to play a lot がカンマにより並列され、共に⑤になっている。

2.挿入のカンマ

(ex) You should, if you want some advice, go to his office alone.

もし何らかの忠告が欲しければ、彼の事務所に1人で行くべきだ

上の英文では if~advice までがカンマにはさまれて挿入されている。

3.その他のカンマ

(1) 副詞節(句)と主節とを区切るカンマ。

(ex) To tell the truth, I quit my job. 実を言うと、仕事を辞めたんだ

(2) 「同格」のカンマ。「つまり」「すなわち」と訳す。

(ex) Our teacher, Henry Evans, is from Canada.

うちの先生の(つまり)ヘンリー・エバンス先生は、カナダ出身です

(3) 関係詞の継続用法(つまり関係詞の直前に置かれるカンマ)。

① 「,+関係代名詞」。

1.カンマ(,)で一旦区切る(関係詞節を前の先行詞にかけて訳さない)。

2.カンマ(,)を接続詞(and, but, because, though等)とみなして訳す。

② どの接続詞とみなすかは前後の意味関係で自分で判断する。

3.関係代名詞は、単なる(直前の先行詞を指す)代名詞とみなして訳す。

(ex) I love my car, whose color is my favorite.

③ 上の英文は、上記のルールを用いて、まず I love my car までを「僕は自分の車が好きだ」と訳し、カンマを because に置き換えてみる。すると後半は「なぜならその(車)の色が僕のお気に入りだからだ」と訳せる。

4. 「,+which」は前の英文全部(又はその一部)を先行詞にとることもできる。

(ex) All the students respect Mr. Black, which I find natural.

学生たちはみなブラック先生を尊敬しているが、私はそれは当然だ
と思う

會上の英文では which の先行詞は All~Mr. Black の全部。

② 「, +関係副詞」。

1. 「, where」は「接続詞+there(そこで)」と考える。

(ex) He went to Paris, where he first met her.

彼はパリに行き、そしてそこで初めて彼女に会った
=and there

2. 「, when」は「接続詞+then(その時)」と考える。

(ex) I was about to leave, when there was a knock on the door.

私はちょうど出かけようとしていた。とするとそのときドアをノック
する音が聞こえた =and then

(4)主語(主部)が長いことを詫びるカンマ。

(ex) A man arrested by the police last week for robbing a convenience store, died

⑤ ↑ p.p.

⑥ ↓ in jail.

コンビニ強盗のかどで先週警察に逮捕されたその男は、拘置所で死亡した

會上例では⑤は A man なのだが、それを修飾する arrested~store 含めた主部が
長すぎるので、⑥(died)の手前でカンマが打たれている。

Rule-63

セミコロン(;)の用法のまとめ

(L・B217ページ)

1.接続詞(and, but, because, though等)の代用のセミコロン。

(ex) John was elected captain of the team; he was very smart.

ジョンはチームのキャプテンに選ばれた。なぜなら彼は頭がよかったからだ

文中のセミコロンが、どの接続詞の代用となっているかは、前後関係から自分で判
断する。

2.同格のセミコロン。「つまり」「すなわち」と訳す。

(ex) There was a lot of work I had to do; washing the dishes, cleaning the room and
looking after my little brother.

私にはやらなければならないたくさんの仕事があった。即ち皿洗いに部屋の
掃除、そして小さな弟の世話だ

Rule-64

コロン(:)の用法のまとめ

(L・B217ページ)

文中のコロンの大半は同格用法で、「つまり」「すなわち」と訳す。

(ex) This shortcake has three layers[層]: red, white and brown.

このショートケーキは三層になっている。つまり、赤、白、茶の三色だ

コロンは、その後に直前の内容を言い換えたり説明し直したりする内容が来ることを予告する記号であると考えよ!

Rule-65

ダッシュ(-)の用法のまとめ

(L・B 217ページ)

1. 挿入のダッシュ。

(ex) John — the only son of the foreign minister — was deeply interested in the international situation.

ジョンはその外務大臣の一人息子だったが、国際情勢に非常に関心を持っていた

挿入のダッシュではさまれた部分は、文の主要素にはならない(Rule-3の4.を参照せよ)。特に挿入部分が名詞の場合は、(前と)同格の可能性が高い。

2. 同格のダッシュ。「つまり」「すなわち」と訳す。

(ex) The villagers respected Jill — a sister from the religious house.

その修道院から派遣された修道女の(つまり)ジルのことを村人たちは尊敬した

Rule-66

文頭の Of の意味の可能性

(L・B 215ページ)

1. 「～について(=about)」

(ex) Of the case which happened yesterday, I have several questions.

昨日起きた事件について、私はいくつかの疑問を持っている

2. 「～の中で、うちで(=among)」 ☞ 2.の可能性が最も高い!

(ex) Of the participants, he had the most positive attitude.

参加者の中で、彼は最も積極的な態度をとった

3. 「of+抽象名詞」が文頭に飛び出した倒置構文。

(ex) Of importance is to acquire knowledge. 大切なのは知識を身につけることだ

【角解】「of+抽象名詞」は形容詞化する、というルールがある。つまり of importance は形容詞の important と同じ意味。その「of+抽象名詞」が文頭に飛び出した CVS 型の倒置構文が上記の例文。下記のように言い換えることができる。

⇒ To acquire knowledge is important.
S V C

Rule-67

冠詞・所有格と名詞の間に置かれた語句は、形容詞として直後の名詞を修飾する働きしかない。

(L・B 249ページ)

冠詞(a.the) } + □ + 名詞 ☞ □は100%、形容詞(の働きをする)。直後の
所有格 } 名詞を修飾する。

(ex) He is my only son. 彼は私のひとり息子です

only には「形容詞」「副詞」両方の品詞があるが、上の英文の only は所有格(my)と名詞(son)の間には含まれているので「形容詞」だとわかる。形容詞の only の意味は「唯一の」。
ちなみに下の英文の only は副詞である。

(ex) He is only a child. 彼はほんの子供にすぎない

その理由は「冠詞・所有格よりも左側にあるものが、その冠詞・所有格を飛び越えて右側の名詞を修飾することはない*」から。上の英文の only はそうすると(冠詞の a の右側にある child は修飾できないので)動詞の is を修飾せざるを得ず、したがって「副詞」だと分かる。副詞の only の意味は「ただ~だけにすぎない」「ほんの~」。

例外は all, half, double, both.

(ex) all the people 全ての人たち double the sum 倍額
half an hour 30分 both the girls 両方の女の子

Rule-68

形容詞の意味

(L・B 16ページ)

英文中の形容詞の60%は「良い」か「悪い」つまり「good型」か「bad型」で分類できる。

(ex) We are proficient at talking about ourselves, but are bad at listening to others.
我々は自分のことについて話をするのは得意だが、人の話を聞くのは下手だ

上の英文では proficient という形容詞が難しいが、but の右側で、それに対応しているのが bad なので (butによって結ばれたもの同士は「逆」の意味関係になるので)、proficient は「good型の形容詞」と類推できる。つまり、「be good at ~ing: ~するのが得意だ(上手だ)」と読み直してしまえばいい。実際、proficient は「上手な、堪能な」という意味で、good に置き換えても全く問題ない。

Rule-69

連鎖関係詞節

(L・B 251ページ)

連鎖関係詞節とは、簡単に言うと先行詞の後ろの関係詞節内が

- ① 「S+Vt V~」 ☞ 「Vt」には「言う(say)」「思う(think, believe, know, suppose)」型の動詞がくることが多い。
② 「S+Vt S+V~」

の形をしているものを言う。

(ex) I saw a woman who I thought was a friend of my mother's.
主格 S Vt V

このような連鎖関係詞節のうまい訳出法は、「S+V^t」の部分をついたん()でくくってしまい、それを(関係詞)節内の和訳の最後にもってくるのである。上の例文でも、関係詞節内は「母の友人だと(私が)思った」と、「S+V^t」にあたる I thought を(関係詞)節内の和訳の最後にもってくるという日本語になる。英文全体は「母の友人だと(私が)思った女性を私は見かけた」となる。

Rule-70

副詞句(節)の訳し方

(L・B35ページ)

副詞の働きをする語句や節は、以下の訳のどれかにおさまることが多い(このうち①~④の意味になることが最も多い)。

- ①「時(〜とき、ながら、と共に)」 ②「条件(もし〜なら)」 ③「原因・手段(〜で・〜により・〜のおかげで)」
④「譲歩(〜けれど、としても)」 ⑤「比例(〜につれて、と共に)」 ⑥「目的(〜するために)」 ⑦「様態(〜のように)」
⑧その他(「場所(〜の場所で・に)」「制限(〜に関する限り)・程度」「比較(〜より・〜と比べて)」「添加(〜に加えて)」等)

副詞句、節については、文頭でなくても、うまく訳せない場合、上記の8つの意味のどれかで(主節や動詞など、つまり「名詞以外」にかけて)訳すという事がほとんど。

① With that in mind, you couldn't have said such an awful thing to your wife.
⑤ ⑦

② With that in mind, I was able to cope with the situation.
⑤ ⑦

上の2つの英文の With that in mind は、両方とも主節よりも左側にある。主節よりも左側にあるものは基本的に副詞の働きをする(Rule-3を参照せよ)ので、With that in mind はそれぞれ副詞句だとわかる。そこで上記の意味の類推法を活かし、主節との意味関係から①は「そのことが頭にあったなら」と「条件」で訳せばいいのでは、②は「そのこと頭にあったので」と「原因」で訳せばいいのでは、と頭を働かせる。

- ①「そのことが頭にあったのなら、君は自分の妻にそんなひどいことを言えなかっただろう」
②「そのことが頭にあったので、私はその状況にうまく対処することができた」

《節の種類のおまわり》

	that節	if節	whether節	what節
名詞節	接続詞「…という(こと)」	「…かどうか」	「…かどうか」	疑・代「なに」 関・代「こと(もの)」
形容詞節	関・代 前の名詞を説明	×	×	×
副詞節	接続詞 下を参照せよ	「もし…なら」「たとえ…としても」	「…であろうとなかろうと」	what we call等のイディオム

- ①名詞節とは、その節が文中でS・O・Cになっている、又は前置詞の後ろに置かれて「前置詞の目的語」になっている節をいう。
 ②形容詞節とは、文中でS・O・Cにはならず、前の名詞を修飾している節をいう。ただ基本的に「形容詞節＝関係詞節」と見ていい(例外はas等)。
 ③副詞節とは、文中でS・O・Cにはならず、名詞以外(多くの場合、動詞や主節等)を修飾している節をいう。

(注1) 接続詞のthatが副詞節を導く(つまりSOCにならない)場合、その用法は大きく分けて以下の3つ。

① so (that) S+may[can/will]+V～ : 「Sが～するために(できるように)」【目的】 ⇨ ごくたまに「その結果～」という意味になることもある。

(ex) We tied him up so that he wouldn't be able to escape.

「私達は、逃げられないように彼をきつく縛った」

She will come early in order that you may read her report.

「彼女は議決の前に自分の原稿をあなたに読んでもらうためにきつと早く来るでしょう」

② I, so (that) S+V～ : 「その結果～だ」【結果】 ⇨ 節頭のカンマ(,)は、ないこともある。

(ex) She changed her hairdo completely, so that no one recognized her.

「彼女はヘアスタイルをすっかり変えたので誰も彼女とは分らなかった」

Ⅱ so[such]～that S+(can)+V… : ①「とても～なので…する(できる)」【結果】

②「…するように(ほど)～だ」【程度・様態】 ⇨ この場合、後ろから訳し上げる。

⇨ 様態の場合、soとthatの間には、「動詞」や「過去分詞」が入ることが多い。後ろから訳し上げる。

(ex) The letter is so written that it gives a wrong idea of the facts.

「その手紙は事実をわざと誤解させるように書かれている」

⇨ 程度の場合、「否定文+so～that S+V…」という形になることが多く、これも後ろから訳し上げると良い。

(ex) He was not so busy that he couldn't write to his parents.

「彼は、両親に手紙を書くことができないほど忙しいわけではなかった」

Ⅲ S+be動詞+such that S+V～ : 「Sは大変なものなので～」

(ex) His anger was such that he became ill. 「彼の怒りは大変なものだったので、彼は病気になってしまった」

③ I 「S(人)+be動詞+形容詞(分詞)+that S+V～」の構文の「be動詞+形容詞(分詞)」の部分は「think(思っている)」「know(知っている)」で訳せることが多い。

(ex) Are you sure that you locked the door?

「確かにドアにカギをかけましたか」 ⇨ 「あなたはドアにカギをかけたと思っていますか」でも訳せてしまう。

Ⅱ 判断を表す語+that S+V～ : 「～するなんて」「～とは」「～のだから」【判断の原因】

(ex) Is he mad that he should say such a silly thing?

「そんなバカなことを言うなんて彼は気がおかしいのか」 ⇨ 例文のように「判断を表す語」とは「人の性格(性質)」を表す語であることが多い。

Ⅲ 感情を表す語+that S+V～ : 「～して(できて)」「～ので」【感情の原因】

(ex) We were disappointed that it was raining. 「私達は雨が降っているのがっかりした」

(注2) 接続詞のthat(同格用法)と、関係代名詞のthatの見分け方は、thatの後に「完全な文」がくれば接続詞、「不完全な文」がくれば関係代名詞と見ればよい。

「不完全な文」というのはSOCうちのどれかが1つが欠けた文のこと。

(ex) You can't deny the fact that you were wrong. ⇨ that節内は完全な文。従ってthatは接続詞。

「君が間違っていたという事実は否定できない」 S V C 「～というA(名詞)」と訳す。

I know the fact that will surprise you. ⇨ that節内は不完全な文(主語がない)。従ってthatは関係代名詞。

「ほくは君をびっくりさせるような事実を知ってる」 V O

(注3) 接続詞のthatが名詞節になる場合でも、前置詞の目的語になることは基本的にない。例外は以下の2つ。これらは「前置詞+that S+V～」の形で使われる決まり文句として覚えた方が早い。珍しいだけに受験ではよく狙われる。

①in that S + V ~:~の点で、~なので

②except (that) S + V ~:~を除いて ☞ exceptの後のthatは省略されることが多い。受験では①の方が頻出。

(注4)thatが関係副詞(where, when, why, how)の代用として用いられることもあるが、そのようなthatは普通、省略される。
またthatのその他の用法として「It is □ that ~」の強調構文を作ることがある。この場合のthatの品詞は特定できないので考えなくていい。

(注5)whetherは、「〜かどうか」という意味で、S・O・Cのいずれにもなれるが、if節が「〜かどうか」という意味になるのは、大抵次の場合。

①以下のような他動詞の目的語になる場合。

know「分かる」、ask「尋ねる」、doubt「疑う」、see「調べる」、tell「分かる」、wonder「思う」等。

(ex) I don't know if [=whether] it is good. 「それがいいかどうかわからない」。

②if節が真主語になる場合。

(ex) It doesn't matter if [=whether] he will come or not. 「彼がくるかどうかは問題ではない」

また文頭のifは、「〜かどうか」という意味には決してならない。①「もし〜なら」②「たとえ〜としても(=even if)」のどちらかである。

「〜かどうか」という意味のwhetherはS、O、Cにもなれるし、前置詞の後ろにも置ける。またもちろん文頭に置くこともできる。

(注6)whether節内に「or not」がなければ、そのwhether節は100%「〜かどうか」と見ていい。

whether to do「原形」は「〜すべきかどうか」という意味しかない。

(注7)whatを用いたイディオムには、以下のようなものがある。このうち①~⑩は副詞節となり、「what節は名詞節を導く」というルールの例外。

①what S is 「現在のS(の姿、性質)」

(ex) His mother made him what he is. 「彼の母が、彼を現在の彼にせしめた」

②what S was[used to be] 「昔のS(の姿、性質)」

(ex) He is not what he was. 「彼は昔の彼ではない」

③what S will be 「未来のS(の姿、性質)」

(ex) I often imagine what my son will be. 「私はよく息子の将来を想像する」

④what S should be 「本来あるべき(理想の)S(の姿、性質)」

=what S ought to be

(ex) Mis. Brown is what a lady should be. 「ブラウンさんは理想的な女性だ」

⑤what S seem to be 「見かけのS(の姿、性質)」

(ex) We tend to judge a person by what he seems to be. 「私達は人を見かけで判断しがちだ」

⑥A is to B what[as] C is to D 「AとBの関係はCとDの関係と同じだ」

(ex) Reading is to the mind what food is to the body.

「読書の精神に対する関係は食物の身体に対する関係に同じである」

⑦what we[you, they] call 「しむゆる」 =what is called

會成り立ち的には what we call C(形・名) は「Cと呼んでいるもの」という名詞節から来ている。

(ex) He is what is called a self-made man. 「彼はいわゆる腕一本で成功した」

⑧what is 比較級 「さらに~なことには」

(ex) It was blowing very hard, and what was worse, it began to snow.

「風がひどく、更に悪いことに雪まで降り出した」

⑨what is more 「おまけに」

(ex) He is well off, and what is more, he is of good birth.

「彼は金持ちで、おまけに名門の出自だ」

⑩what with A and (what with) B 「AやらBやらで」

(ex) What with the heat and humidity, he could not sleep well.

「暑いやらむしむしするやらで彼はよく眠れなかった」

	when節	where節	how節	why節	who/which節
名詞節	「いつ」「時(時間)」	「どこ」「場所(合)」	「どのように」「方法」	「なぜ」「理由」	「誰」「どちら」
形容詞節	関・副 前の名詞を説明	関・副 前の名詞を説明	×	関・副 前の名詞を説明	関・代 前の名詞を説明
副詞節	接続詞「…の時・したら」	接続詞「…する所に」等	×	×	×

(注1) when, where, why, howが名詞節を導く場合の訳し方は2種類で、

①それらが「疑問副詞」の場合、「いつ」「どこ」「なぜ」「どのように」と訳せる。

(ex) I don't know when she will come here. 「いつ彼女がここにくるのかわかりません」

O

②それらが「(先行詞が省略された)関係副詞」の場合、「時」「場所(合)、所」「理由」「方法」等と訳せる。以下に例を挙げてみよう。

(ex) Monday is (the day) when I am busiest. 「月曜日は私が一番忙しい時(日・曜日)です」

Show me (the place) where we can have a drink of water. 「水を飲める所に案内してください」

That is (the reason) why I cannot go. 「それが私のいけない理由です」

(注2)(副詞節を導く)接続詞としてのwhenには、実際の英文では「～の時・したら」以外に複数の意味があって要注意。

①「前の英文を受けて」(…すると)そのとき

(ex) I was thinking about her, when another call came from her.

「私は彼女のことを考えていたが、(と)その時彼女からもう1度電話がかかってきた」

②「通例現在時制の文で」～するときはずっと = whenever

(ex) I get annoyed when I am kept waiting. 「待たされているときはいつもイライラする」

When she listens to the radio, my mother falls asleep. 「母はラジオを聞いているといつも眠ってしまう」

③「対照・譲歩」～なのに、～だというのに、～だけれども(たととしても) ⇨「譲歩」のwhenの用法は頻出!!

(ex) Why did he give up trying, when he might have succeeded?

「彼は成功したかもしれないのにどうしてあきらめてしまったのか」

The heat didn't ease when the sun went down. 「日が沈んだけれども、暑さはやわらかなかった」

④「理由」～なので = since

(ex) I cannot go when I haven't been invited. 「招待されていないので私はいけません」

⑤「現在時制と共に」～ならば ⇨ ifを用いるより確実性が強い。

(ex) No one can swim when they haven't learned how. 「泳ぎ方を習っていないければ誰も泳げない」

⑥「形容詞節として直前の名詞を修飾して」～する[した]時の

(ex) I can imagine his astonishment when she asked him to marry her.

「彼女が彼に結婚してほしいと言ったときの彼の驚きを想像できる」

⑦「when S saidで」Sが約束した時間に

(ex) Call me back when I said. 「今言った時間に電話をかけ直してくれ」

(注3)(副詞節を導く)接続詞としてのwhereにも、「～する所に(へ)」以外に複数の意味があって要注意。

①～する所に(へ・で)、～する場合に(は)

(ex) Put back the book where you found it. 「その本をもとあった場所に戻しておきなさい」

Where there is a will, there is a way. 「意思ある場合には、道はある」⇒「意思あるところ、道は開ける」

②～する所はどこ(へ)でも = wherever

(ex) Go where you like. 「どこでも好きな所へ行きなさい」

③「対照・範囲」～する(である)のに = whereas

～する(である)限りでは

(ex) Where he was shy, his brother was gregarious. 「彼は内気だったが、弟の方は社交的だった」

Where known, the facts have been reported. 「判明している限りではその事実は報告されていた」

(注4)関係副詞のhowが省略されて、残った先行詞のthe wayが接続詞的に用いられることがある。その場合、

①the way S+V～が全体で名詞節になっていれば(つまりSOCになったり、前置詞の後ろに置かれたりしていれば)、「～のやり方(方法)」「～の様(様子・過程)」「どのように～」と訳せば良い。 =the way[manner] in which S+V～ =how S+V～

=the way[manner] that S+V～

(ex) I don't like the way he talks to me. 「彼の私に対する話し方が気に入らない」

②the way S+V～が全体で副詞節になっていれば(つまりSOCのどれにもなっていないければ)、「～のように」と訳せば良い。 =as S+V～

(ex) Do it the way you were told. 「言われたようにそれをしなさい」

(注5)whatとhowが導く節や句は、基本的に名詞節になる(つまりS・O・Cのどれかになる)。例外はwhat we call等のwhatを用いた決まり文句。

	whoever節 whatever節 whichever節	whenever節 wherever節 however節	as節
名詞節	「…する者は誰でも」 「…するものは何でも」 「…するものはどちらでも」	×	×
形容詞節	×	×	関・代 先行詞を説明
副詞節	「たとえ誰が…しても」 「たとえ何が(を)…しても」 「たとえどちらが…しても」	「たとえいつ…しても」「…する時はいつでも」 「たとえどこで…しても」「…する所はどこでも」 「たとえどう…しても」「どんな方法で…しても」	①[時]「[の]時」「[し]ながら」②[理由]「…なので」 ③[比喩]「…につれて」 ④[様態]「…のように」「…だが」「…とは違って」

(注1)「00+ever」節が、副詞節で用いられる(つまりSOCにならない)場合、すべて「たとえ～しても」という譲歩の意味になる点に注意。そしてそれらは「no matter+00」で書き換えられる。
(ex) whoever ⇒ no matter who 「たとえ誰が～するとしても」

(注2)接続詞の(つまり後ろに「S+V」を持つ)asの7割は「時」か「理由」なので、まずそれで訳してみてもおかしい場合は次の可能性を考えてみたらいい。asが「～につれて(に伴って)」となる場合、節内の動詞(つまりas S+Vの「V」)が「変化(～になる、増える、減る等)」や「進行(ゆく、過ぎる等)」を表すことが多い。またasが「様態(～のように・～だが)」を表す場合は、as節内が「不完全な文」や「直前と同じ形の繰り返し(の文)」になったり比較級が使われていたりすることが大半。
(ex) You must do the work as I do. 「君は、私がするようにその仕事をしなければならない」
Men usually like wrestling as women do not. 「女性とは違って男性は普通レスリングが好きだ」
特に、「～とは違って」となる場合、上例のように、asの前後で否定と肯定が入れ代わっていることが多い。

(注3)「□ as S+V～」で「Sは□だけれど」という構文もある。□の部分には「形容詞」「副詞」「名詞」等が入る。
(ex) Young as he was, he was brave. 「彼は若かったけれど、勇敢だった」
(形) S V

(注4)接続詞のasも、名詞にかかってその意味を限定する(つまり例外的に、形容詞節になる)場合がある。
(ex) man as compared with other animals 「他の動物と比較した場合の人間」
the history of Japan as we know it 「我々が知っている(ような)日本の歴史」

(注5)関係代名詞のasとしては、以下の決まり文句が頻出。関係代名詞なのでasの後ろには「不完全な文」くる。
①as is often the case with A:「Aにはよくあることだが」
②as is usual with A:「Aにはいつものことだが」
関係代名詞のasは先行詞よりも前に出ることができるのが特徴。
(ex) As is often the case with him, Tom was late for school.
「トムにはよくあることだが、彼は学校に遅刻してきた」
☞文頭のasは関係代名詞で、先行詞はTom was late for schoolの部分。

(注6)上記以外の従属接続詞(because, while, though, unless, until等)は副詞節しか導かない(つまりSOCになることはない)。

(注7)who(ever), which(ever), what(ever), whom(ever), whose(ever)の後ろには必ず「不完全な文」が続く。それ以外の「接続詞」「関係副詞」「前置詞+関係代名詞」「疑問副詞」の後ろには「完全な文」が続く。例外は以下の3つ。
①疑問代名詞として用いられる場合のwhere。
(ex) Where are you from? 「どちらの出身ですか」
②元々の補語だったものが疑問副詞のhowになった場合。
(ex) How are you? 「お元気ですか」
③関係代名詞として用いられる場合のas, that。☞これについては既に説明済み。
☞また、繰り返しを避けるための省略や、(従属接続詞等の後ろで)「主語+be動詞」が省略されることによって「不完全な文」構造になることはもちろんあり得る。

特別講義

第一文型(S+V)の表す意味について。

1.一般によく言われる第一文型(S+V)の意味。

一般に第一文型の動詞の意味は以下の4つに分類できると言われています。

(1)「存在・状態(いる・ある)」… be, live, stay, remain, last, wait 等

(ex) I am in trouble. 私は困っている
I live in Tokyo. 私は東京に住んでいる

(2)「移動・発着(行く・来る・着く・発つ)」… come, go, arrive, get, start, leave 等

(ex) I went to Kyoto with my family. 私は家族と一緒に京都へ行きました

(3)「出現・発生(生じる・現れる)」… appear, happen, occur 等

(ex) A surprising thing occurred this morning. 驚くべきことが今朝起こった

(4)「その他」

(ex) She insisted on his going there. 彼女は彼がそこに行くよう言い張った
The business has been paying. その事業はもうかっている

しかしこれでは(4)の「その他」のグループに入る動詞が多すぎて、実際にはこの意味の分類はあまり役に立ちませんね。

2.セットの前置詞・副詞をヒントにした第一文型の意味の類推法。

そこでより実用的な第一文型の意味の分類法を考えてみたいと思います。
それが以下の2種類の分類の仕方です。

- (1)「S+V+前置詞[副詞]」の構造から即文全体の意味を類推できるタイプ。
- (2)「前置詞[副詞]のイメージ」から類推した方がてっとり早いタイプ。

(1)「S+V+前置詞」の構造から即文全体の意味を類推できるタイプ。

①「S+V from ~」型。

前置詞の from は、記号で言うなら「←」で表すことができます。

S V from ~
←

ここから「S+V from ~」型は以下の3つの意味に分類することができます。

- (ex) We **went into** the house. 私達はその家の中に入った
 He **is well into** his forties. 彼は40歳をかなり越えている
 The custom has **survived into** the twentieth century.
 その習慣は20世紀まで続いている
 She **worked far[late] into** the night. 彼女は夜ふけまで勉強した
 ㊦「勉強をして夜遅くの中に入る」ということ。
 He **ran into** debt. 彼は借金をした
 ㊦「借金の中に入る」ということ。
 We **entered into** a five-year contract. 我々は5年契約を結んだ
 I **got into** difficulties. 私は困難に陥った
 They **inquired into** the matter. 彼らはその事件を調査した
 ㊦上例のように「～の中に入る」から比喩的に「～をのぞき込む(中に入って
 見てみる)」→「～を調査する」といった意味にもなる。以下も同じ用例。
 I didn't **go into** details. 詳細には論じなかった
 The car **ran into** the wall. その車は壁にぶつかった
 ㊦上例は run against ～でも表現できるが、into では対象物の中に入りこんだ
 り変形したり移動したりすることが暗示されるのに対し、against になると
 堅い物に当たってはね返されるというニュアンスになる。
 (ex) The ship **ran against** an iceberg. その船は氷山にぶつかった
 また run into の場合、比喩的に「(人に出くわす)」「(困難等に)遭遇する」と
 という意味にもなる。
 (ex) They **ran into** heavy weather. 彼らは悪天候に遭遇した
 I **ran into** an old friend at the store.
 その店でひょっこり旧友と出くわした
 She **bumped into** me. 彼女は私にドスンとぶちあたった
 ㊦「中に入り込む→めり込む」イメージ。
 She's very much **into** jazz. 彼女はジャズに夢中になっている
 ㊦上例のように「～の中に入る」から転じて「～の中にどっぷりと入り込む
 →夢中になっている」という意味にもなる。
 We **separated into** five groups. 我々は5つのグループに分かれた
 ㊦「～の中に入る」に separate の「分かれる」という意味が効わり、
 「～の中に(分かれて)入る→～に分かれる」という意味になった。
 The year **falls into** four seasons. 1年には四季の区分がある

2. [～ = (変化した)結果] 「～に変わる」

- (ex) They **burst into** laughter. 彼らはどっと笑った
 ㊦「笑顔に変わる」ということ。
 He **turned into** a tyrant. 彼は独裁者に変身した
 The sleet **changed into** snow. みぞれは雪に変わった
 ㊦change to ～という表現もあるが、一般に into は、ある物が別の物に変化する
 ことを表すのに対し、to は1つのものの状態の変化を示すのが違い。
 (ex) The drizzle **changed to** a rain. 小雨が本降りになった

※ときに動詞と into の間に副詞が割り込むこともある。

- (ex) He used to sit in the easy chair at the porch and **float off into** his fantasies.

③ 「S + V for ～」型。

「S+V for ~」型は以下の3つの意味に分類することができます。

1. 「~に向かって進む」

- (ex) The ship **made for** the shore. 船は岸に向かって進んだ
She prepared to **leave for** home[the station].
彼女は帰宅の「駅に向かう」用意をした
Their plan was **heading for** trouble. 彼らの計画は前途多難だった
☞ 「トラブルに向かって進んでいた」ということ。

2. 「~を求める」

- (ex) She **longs for** your return. 彼女は君が帰ってくるのを待ちこがれている
He **reached for** his cigarettes. 彼はタバコを取ろうとした
Who are you **looking for**? 誰を捜していますか

3. その他

- pay for A: ① 「A(品物)の代金を支払う」
② 「A(人)に代わって代金を支払う」

• be for A: 「Aのためのものである」

• work for A: 「Aのために働く」

• fit for A: 「Aに向いている」

• stand for A: 「Aを表す、象徴する」

(ex) UN **stands for** United Nations. UN は United Nations(国連)の略です

☞ 上記以外でも「~の間」という for と動詞が結びついて run for~(~の間走る)、last for A(Aの間持ちこたえる)、「~に賛成して」という for と動詞が結びついて vote for~(~に賛成投票する)等もありうる。

④ 「S+V to ~」型。

「S+V to ~」型は以下の2つの意味に分類することができます。なお注意してほしいのは、ここでの to は前置詞の to です。

1. 「~へと(自分自身を)送り込む」「~に(まで)至る」 ☞こちらが重要!

- (ex) I **got to** the park. 私は公園に着いた
☞ 「公園に自分自身を送り込んだ」ということ。
Japan **committed to** military cooperation with the US.
日本は米国との(の)軍事協力を約束した
☞ 「日本は米国との軍事協力をする立場に自らを送り込んだ」ということ。
She **took to** drinking. 彼女は酒にふけた
Everybody **took to** him at once. みんなが彼をすぐに好きになった
☞ take to A には上例のように①「Aにふける」②「Aを好きになる」という意味があるが、これらは①であれば「A(良くないもの)に自分自身を送り込む」、②であれば「A(興味の対象)に自分自身を送り込む」ということ。
You should **keep to** this timetable.
あなたはこのスケジュール表に従わなければなりません
☞ keep to A(規則・計画)で「Aに従う、Aを守る」という意味だが、これは「Aに自分自身を送り込んでそれを keepする(保つ)」ということ。
stick to A(Aに固執する)も同じタイプで「A(主義・決定)に自分自身を送り

込んでそこに stick(留まる・しがみついている)」ということ。

2. 「～に対して〇〇する」

會「～」は主語の行う行為の対象。

代表的なものは talk[speak] to ~ (～に対して話しかける)、appeal to ~ (～に対して訴える)、respond to ~ (～に対して反応・対応する)、admit to ~ (～を認める) 等があります。

それから「S+V to ~」型の例外として add to A があります。これは「Aを増す、増やす」という意味です。

(ex) This **adds to** our troubles. これでやっかいなことがまた増える

上の英文の場合は、This adds a **trouble** to our troubles. の a trouble が (to 以下と同じなので) 省かれたと見るといいのです。つまり (add A to B で「AをBに加える」という語法があるので) 「これはもう一つのやっかいごとを、(今ある)我々のやっかいごとに加えることになる」と考えるといいでしょう。

⑤ 「S+V in」型。

「S+V in」型は以下の4つの意味に分類することができます。

「S+V in」型の場合、以下のように in の後ろに目的語を取らない場合も多いです (その場合の in は品詞的には副詞になる)。

1. 「(～)の中に入る」

「～にまで至る」

(ex) The sun **got in** through the window. 日光が窓から差し込んだ
The water **ran in**. 水が流れ込んできた
Her feet **turn in**. 彼女の足は内まただ
Come in. (中)に入ってきてなさい

2. 「始まる・動く[き出す]」

會「ある状態・行為の中に入る → 始まる・動く(き出す)」となった。

(ex) The rainy season has **set in**. 雨季が始まった[雨期に入った]

3. 「～の中にいる[ある]・とどまる」

(ex) I **lived[stayed] in** London. 私はロンドンに住んでいた[滞在した]
True happiness **lies in** satisfaction. 真の幸せは満足の中にある
He **persists in** her belief. 彼はがんとして信念を曲げない

4. 「～を中に入れる」「～を取り[受け入れる]」 ⇨ S+V ~ in. となることもある

(ex) **Take** the washing **in** before it rains. 雨が降る前に洗濯物を取りこみなさい

(2)前置詞[副詞] のイメージから類推した方がてっとり早いタイプ。

「S+V on ~」型は、on が「接触」を表すので「～に接触して(した状態で)〇〇する」が基本となります。たとえば survive on A は「Aでもって食いつなく」という意味ですが、これは A は「手段」です。つまり「Aを手段としてその上で生き延びる → A

で食いつなく! となるのです。

(ex) He **survived on** water in the desert for a week.

彼は一週間の間砂漠で、水で食いつないだ
My salary is just enough to **survive on**.
私の給料ではやっと生きていけるだけだ

depend on A は、on は同じように「接触」ですが、A は「依存する対象」です。
つまり「A に接触して「つかまって」ここにぶら下がっている → (自分では何もせずに) A
に依存している、頼っている」となるのです。

④ depend の語源は「de(下に) + pend(ぶら下がる)」。同じ語源を持つ語に pendant が
ある。「ペンダント」とは首から「ぶら下げる(下がっている)」ものだ。

(ex) We **depend on** the newspapers for information about it.

我々はそれに関する情報を新聞によって得ている

go about A は「A = 仕事」の場合、「A に取りかかる」ですが、これは about が「周
辺」を表し、「A の周辺へに行く → A に取りかかる」となったのです。

(ex) I **went about** my graduation thesis. 私は卒論に取りかかった

「S+V with ~」型は、with が「~ と共[一緒]に」という意味の場合は、「~ と共に存
在する」「~ と共に行く[来る]・変わる」と、「存在」や「移動・変化」を表すこと
が多いと言えるでしょう。

(ex) Don't **associate with** dishonest people. 不正直な人たちとは交際するな

Prices **vary with** the seasons. 値段は季節とともに変わる

with が「手段」を表す場合は「~ をもって〇〇する」となります。

(ex) I **paid with** a check. 私は小切手で支払った

「S+V out of ~」型は、out of が「~ の外へ[に・で]」という意味を表すので、「~ か
ら出ていく[くる]・~ から出て「離れて」しまっている」という意味になります。

(ex) They **got out of** the room. 彼らは部屋から出ていった

He **came out of** the room. 彼は部屋から出てきた

We **were out of** danger. 我々は危険を脱した

The manager **was out of** his office on business.

支配人は仕事で事務所にいけなかった

また「離れている → 手が届かない → ~ がない」という意味にもなります。

(ex) The goods you ordered **is now out of** stock.

注文いただいた商品は現在在庫切れです

She's **out of** food. 彼女は食料を切らしている

He **is out of** work. 彼は失業中だ

① 「S+V from ~」型。

1. 「Sは~から(もどって・やって)来る・移動する・遠ざかる」

☞この場合、「~」は「(動作などの)起点」を表す。

2. 「S=結果」、「~=原因」の意味関係になる

☞その場合は「~が原因となってSが生じる」といった訳がうまくはまることが多い。そしてこの意味になる場合、Sは「物事」を表す名詞であることが多い。

3.その他

・suffer from A: Aに[で]苦しむ

② 「S+V into ~」型。

1.[~ = 場所(帰着点)・空間・時間・事業・活動] 「~の中へ[に]入る」

2.[~ = (変化した)結果] 「~に変わる」

「~にまで至る」

③ 「S+V for ~」型。

1. 「~に向かつて進む」

2. 「~を求める」

3.その他

・pay for A: ①「A(品物)の代金を支払う」②「A(人)に代わって代金を支払う」

・be for A: 「Aのためのものである」

・work for A: 「Aのために働く」

・fit for A: 「Aに向いている」

・stand for A: 「Aを表す、象徴する」

☞上記以外でも「~の間」という for と動詞が結びついて run for~(~の間走る)、last for A(Aの間持ちこたえる)、「~に賛成して」という for と動詞が結びついて vote for~(~に賛成投票する)等もありうる。

④ 「S+V to ~」型。

1. 「~へと(自分自身を)送り込む」 「~に(まで)至る」 ☞こちらが重要!

2. 「~に対して〇〇する」

☞「~」は主語の行う行為の対象。

(ex) talk[speak] to~, appeal to~, admit to ~等

☞例外として add to Aがある。これは「Aを増す、増やす」という意味。

⑤ 「S+V in (~)」型。

1. 「(~の中)に入る」 「~にまで至る」

2. 「始まる・動く[き出す]」

☞「ある状態・行為の中に入る → 始まる・動く[き出す]」。

3. 「~の中にある[ある]・とどまる」

4. 「~を中に入れる」 「~を取り[受け]入れる」 ☞ S+V ~ in.となることもある。

⑥ 「S+V with ~」型。

1.with が「~と共に[一緒に]」という意味の場合は、「Aと共に存在する」「Aと共に

に行く[来る]・変わる」と、「存在」や「移動・変化」を表すことが多い。

2.with が「手段」を表す場合は「Aでもって〇〇する」。

⑦ 「S+V out of ~」型。

1. 「~から出ていく[くる]、出る・~から出て[離れて]しまっている」
2. 「~がない」

⑧ 「S+V out」型。

1. 「外へ出る[出ている・出ていく]」「現れる」
2. 「無くなる[無い]」「消える」

會 out を用いて「現れる」「消える」という一見相反する意味になるのは、out という語は「何かがある範囲から出る動作」を表すから。話し手もまたその「範囲・活動」の内側にいて、そこからあるものが「出る」となれば、(話し手から見れば)それは「消える」「出て行く」動作になる(これを「退出の out」と言う)。逆に話し手の方はその「範囲・活動」の外側にいて、あるものが(その範囲・活動から話し手のいる側へと)「出る」となれば、(話し手から見れば)それは「出て来る」「現れる」動作になる(これを「出現の out」と言う)。これが out が一見正反対の意味を持つように見える理由だ。

會 「S+V out」では、以下のような表現もある。

(ex) Look[Watch] out! 気をつける
Your idea is out. 君の考えは間違っている
fill out いっぱいに満たす[なみなみとつぐ]

會 「S+V out ~」型は、「①~を外へ出す ②(外に出した結果)~を消す・無くす」(「退出の out」の場合)か、「(外に出した結果)~を現す、明らかにする」(「出現の out」の場合)。また比喩的に「~をやり遂げる」となることもある。「やり遂げる」となるのは「退出 out」の発展形。「物事を(やるべき)活動の範囲から出す(はずす) → 物事を(最後まで)やり切る・やり終える → やり遂げる、徹底的にやり尽くす」となるのだ。

⑨ その他。

1. S+V away[aside] 型 ⇒ 「遠ざかる[脇にどく]」

會 S+V away[aside] ~ / S+V ~ away[aside] なら「~を遠ざける[捨てる・どかす・片づける]」。away の場合、「遠ざける」でいいが、aside の場合、「①取り除く、捨てる ②(後で必要なので)取っておく」の2つの意味の可能性がある

2. S+V back 型 ⇒ 「(元に戻る、さかのぼる)」

會 S+V back to ~ なら「~に戻る、さかのぼる」。S+V back ~ なら「~を(元に戻る)」。

3. S+V up 型 ⇒ 「立ち上がる、Sが(突然)現れる」

會 put up(宿泊する)、sit[stay] up(寝ないで起きている)等、例外的なものもある。

4. S+V off 型 ⇒ 「離れる[れている]」「出る[ている]」

會 応用形として、This pork is off.(この豚肉(は)いたんでいる)などがある。これは「本来の(食べられる)状態から離れている → 痛んでいる」ということ。S+V ~ off / S+V off ~ なら「①~から離れる[れている]、出る[ている]、②~を離れた[出た]状態にする[なる・である]」。

【問題演習】以下の英文を訳せ。

Generation gaps, wars, and prejudices stem, at least in part, from what is communicated.

《語句》 prejudice: 偏見 in part: ある面では、いくぶんかは
 at least: 少なくとも

【解説】

at least in part という副詞句を()でくくると、「S+V from ~」型の骨組みが見えてくる。「S = 結果」「~ = 原因」の関係と見る。

実際、stem from A で「Aから生じる、起こる」「Aに由来する」という意味がある。

【全訳】

「伝えられるものが原因となって、世代間のギャップ、戦争、偏見が、少なくともある面では生じるのだ」

LESSON BOOK REVIEW 目次

1.文型判断と読解の基本 1 page
Rule-1 各品詞の文中での役割(働き) 1 page
Rule-2 「句」のまとめ 2 page
Rule-3 「節」のまとめ 3 page
Rule-4 節の終わりの見極め法 3 page
Rule-5 文の骨組み(主要素)を決定する際、いったん()でくっつけてしまうといふもの(つまり文の骨組みにはならないもの)。 3 page
Rule-6 whatとhowが導く節や句の役割(働き) 4 page
Rule-7 英文読解の基本手順 5 page
Rule-8 ③と④の間の挿入部分の可能性 5 page
Rule-9 thatが接続詞なのか関係代名詞なのかの見極め法 6 page
Rule-10 後置修飾の過去分詞の見極め法 6 page
2.接続詞 8 page
Rule-11 等位接続詞(and, but, or)の働き 8 page
Rule-12 等位接続詞を見かけたら、まずの等位接続詞の右側から攻めていくといい。つまり、まず右側の構造(形)に着目し、それと同じ構造になっている箇所を(等位接続詞の)左側に探してみるという手順で読み進めていく 9 page
Rule-13 1.異なる品詞(形)同士でも、文中の機能が同じなら、(機能優先で)等位接続詞によって結ばれることがありうる 2.結果として等位接続詞によって結ばれているもの同士が、等しい構造にならないことがありうる 9 page
Rule-14 等位接続詞の後ろが「不完全な形」で、その意味が取りにくい場合、同構造になっているその直前の文(箇所)を参考に、繰り返しによる省略によって生じた「不完全な形」を元の「完全な形」に戻してみる 9 page
Rule-15 1.andによって結ばれる両者が意味的に同類にならない場合andの後ろに副詞が省略されている可能性が高い 2.butやorも、「しかし」「又は」以外に複数の意味を持つので注意が必要 10 page
Rule-16 従位接続詞の働き 10 page
Rule-17 whetherのまとめ 10 page
3.形と意味	
Rule-18 SV(第一文型)の意味の類推法 11 page
Rule-19 SVC(第二文型)の見極め法 11 page
Rule-20 SVC(第二文型)の意味の類推法 11 page
Rule-21 SVO(第三文型)の意味の類推法 12 page
Rule-22 SVO ₁ O ₂ (第四文型)の意味の類推法。 12 page

Rule-23	SVOC(第五文型)の意味の類推法13 page
Rule-24	「言う」「思う(みなす)」「知る(分かる)」型動詞が後ろにとる形14 page
Rule-25	その他の形から類推できる意味のまとめ14 page
	《SVOCをとる他動詞とそのCのバリエーションのまとめ》15 page
Rule-26	動詞とその後に続く形からの意味の類推法15 page
Rule-27	受動態のまとめ16 page
4.準動詞	17 page
Rule-28	カンタン不定詞見極め法17 page
Rule-29	「結果」の不定詞とは、その不定詞部分を「接続詞+S+V～」で書き換えられるものこと17 page
Rule-30	1.不定詞が感情の原因を表す場合、不定詞の前に感情を表す語がある 2.その場合その不定詞部分は「～して」「～できて」と訳せばいい17 page
Rule-31	1.不定詞が判断の根拠を表す場合、不定詞の前に人の性質・性格を表す語や good型・bad型の形容詞(分詞)等がある 2.その場合その不定詞部分は「～なんて」「～とは」と訳せばいい17 page
Rule-32	1.不定詞が条件を表す場合、主節に推量の助動詞があることが多い 2.その場合、その不定詞部分は「もし～(なら)」と訳せばいい18 page
Rule-33	be to構文18 page
Rule-34	準動詞の完了形の表す意味19 page
Rule-35	準動詞とその意味上の主語19 page
Rule-36	文中の「名詞+doing～」の可能性20 page
Rule-37	分詞構文のタイプとその訳し方21 page
5.倒置・語順変化(文の要素の移動)	22 page
Rule-38	「(準)否定の副詞(句・節)」の倒置の公式22 page
Rule-39	M(一般の副詞)を強調する倒置の公式23 page
Rule-40	SVCの倒置の公式23 page
Rule-41	O(目的語)を強調するパターン24 page
Rule-42	So V S / Neither[Nor] V S24 page
Rule-43	仮定法におけるif節の倒置25 page
Rule-44	There+be動詞/一般動詞+S(名詞)構文25 page
Rule-45	比較級のas以下、than以下の倒置26 page
Rule-46	SVOC ⇒ SVCO26 page
Rule-47	SVCM ⇒ SVMO26 page
Rule-48	譲歩節中での語順変化27 page
6.省略	27 page
Rule-49	英文中で文法的に説明のつかない箇所に出会ったら27 page
Rule-50	thatの省略28 page
Rule-51	evenの省略29 page
Rule-52	「名詞+S+V」29 page
Rule-53	副詞節中の「S+be動詞」の省略30 page

Rule-54	比較級での省略	……30 page
Rule-55	those, others, many, some等	……31 page
7. その他の読解ルール		
Rule-56	howのまとめ	……32 page
Rule-57	文(節)頭の不定詞句の見極め法	……33 page
Rule-58	文(節)頭のDoing~の見極め法	……33 page
Rule-59	文(節)頭のWhether節の見極め法	……34 page
Rule-60	文(節)頭のWho[What/Which]+ever節の見極め法	……34 page
Rule-61	同格のまとめ	……35 page
Rule-62	カンマ(,)の用法のまとめ	……36 page
Rule-63	セミコロン(;)の用法のまとめ	……37 page
Rule-64	コロン(:)の用法のまとめ	……37 page
Rule-65	ダッシュ(-)の用法のまとめ	……38 page
Rule-66	文頭のOfの意味の可能性	……38 page
Rule-67	冠詞・所有格と名詞の間に置かれた語句は、形容詞として直後の名詞を修飾する働きしかない	……39 page
Rule-68	形容詞の意味	……39 page
Rule-69	連鎖関係詞節	……39 page
Rule-70	副詞句(節)の訳し方	……40 page
節の種類 のまとめ		……41~44 page
特別講義 第一文型(S+V)の表す意味について		……45~53 page

受験に限らず私たちが生きていく上で「時間」ほど大切にしなければならないものはないのではないのでしょうか。しかし大切だとわかってはいても、普段の生活の中で「時間」をうまく使えていないのが私たちでもあります。そこでこんな言葉を君たちに紹介しましょう。「時」の、そして「今」の持つ意味をもう一度考え直すチャンスになれば…そう思います。

「プレゼント」

次のような銀行があると、考えてみましょう。その銀行は、毎朝あなたの口座へ86,400ドルを振り込んでくれます。同時に、その口座の残高は毎日ゼロになります。つまり、86,400ドルの中で、あなたがその日に使い切らなかった金額はすべて消されてしまいます。あなただったらどうしますか。もちろん、毎日86,400ドル全額を引き出しますよね。

僕たちは一人一人が同じような銀行を持っています。それは「時間」です。毎朝、あなたに86,400秒が与えられます。毎晩、あなたが上手く使い切らなかった「時間」は消されてしまいます。それは翌日に繰り越されません。それは貸し越しできません。毎日、あなたの為に新しい口座が開かれます。そして、毎晩、その日の残りは消されてしまいます。もし、あなたがその日の預金を全て使い切らなければ、あなたはそれを失ったこととなります。過去にさかのぼることはできません。あなたは今日与えられた預金の中から「今」を生きなければなりません。

だから、与えられた「時間」に最大限の投資をしましょう。そして、そこから健康、幸せ、成功のために最大の物を引き出しましょう。時計の針は走り続けてます。今日という日に最大限の物を作り出しましょう。1年の価値を理解するには、落第した学生に聞いてみるといいでしょう。1ヶ月の価値を理解するには、未熟児を産んだ母親に聞いてみるといいでしょう。1週間の価値を理解するには、週間新聞の編集者に聞いてみるといいでしょう。1時間の価値を理解するには、待ち合わせをしている恋人たちに聞いてみるといいでしょう。1分の価値を理解するには、電車をちょうど乗り過ごした人に聞いてみるといいでしょう。1秒の価値を理解するには、たった今、事故を避けることができた人に聞いてみるといいでしょう。10分の1秒の価値を理解するためには、オリンピックで銀メダルに終わってしまった人に聞いてみるといいでしょう。

だから、あなたの持っている一瞬一瞬を大切にしましょう。そして、もしあなたがその大切な人生の一時（ひととき）を誰かと過ごそうと思っているのなら、その一時とその相手を十分に大切にしましょう。その人は、あなたの「時間」を使うのに十分ふさわしい人でしょうから。

そして、「時間」は誰も待ってくれないことを覚えましょう。もし今日という日を役立てないままに過ごしてしまえば、それは永久に失われてしまう。二度と戻ってはこないのです。今日という日は、昨日あれほどいろんなことをしようと思っていたあの「明日」なのだということをよく心に刻んでおいて下さい。そしてこの貴重な今日という日もまた、やがて永遠の時の彼方に去ってしまうのだということを忘れてはなりません。私達が生きることができるのは現在だけであって——過去は既に無くなっており——未来はまだ到達していません。昨日は、もう過ぎ去ってしまいました。明日は、まだわからないのです。「昨日」を悔やみ、「明日」を思いわずらうことをやめましょう。私たちは、今、この時を生きることができるだけなのですから。「今日」は与えられるもの。だから、英語では「今」をプレゼント(=present)と言うのです。